ヌエバでチャンピオンを目指せ!!

国際ハンドボール連盟公認球

日本リーグ唯一の公式試合球

全日本大学選手権（インカレ）
唯一の公式試合球

日本ハンドボール協会検定球

本大会試合球

国際ハンドボール連盟公認球
日本ハンドボール協会検定球

32H300WRB　ヌエバ

●手縫い●天然皮革●3号球●32枚パネル●白×赤×青×黒

国際ハンドボール連盟公認球
日本ハンドボール協会検定球

32H200WRB　ヌエバ

●手縫い●天然皮革●2号球●32枚パネル●白×赤×青×黒

株式会社 モルテン

東京本社　〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7
大阪・名古屋・福岡・広島・四国・仙台・札幌・リノU.S.A.・デュッセルドルフG

巻頭言

世界とのかけ橋

(財)日本ハンドボール協会副会長　渡邊佳英

輝かしい21世紀の幕があけた。毎年のことだが、年頭にあたり身が引き締まる思いで新年の決意や抱負を考える。今年は新しい世紀を迎えたというだけでなく、その思いは今までになく強い。それは昨年11月、ポルトガルで開催されたアジア・ハンドボール連盟（以下AHF）の総会で第一副会長に選ばれ、国際ハンドボール連盟（以下IHF）の理事に推されたからである（その後開催されたIHFの総会で承認されている)。

今回の総会で特筆されることは、アジア連盟では老害を撒き散らしていたパキスタンのアブール・ハッサンが専務理事を引退し、代わりにインドのロシャン・アナンド氏が就任したことと、国際連盟の総会では、長年会長を務めたエルヴィン・ランス氏に代わりエジプトのハッサン・ムスタファ氏が就任したことであろう。

IHFはこれまで欧州主導で運営されてきたが、それに対するアフリカ、アジア（特にアラブ諸国)、中南米諸国の反発が強く、今回のような数の力による会長交代劇が行われたわけである。これは商業主義と政治の戦いであると思う。商業的に考えれば、スポンサーが獲得できる、欧州中心の運営になり、新興勢力との摩擦が予想される。私の仕事はアジア代表理事としてこのようなギクシャクとした関係にあるアジア（特に中近東)・アフリカ・中南米とのかけ橋になることだと思っている。

幸い亡父渡邊和美が長年IHFの理事を務めていたこともあり、ハンドボールファミリーとして知人も多い。これらの人脈を生かしてIHFを円滑に運営できるよう協力していきたい。

AHFでは、今回の総会で世界選手権アジア地区予選の東西統合が可決された。このような形で東、西アジアの融和に努めたい。

IHF総会の際には、東アジア（日本、中国、韓国）クラブリーグを2001年から3カ国持ち回りで開催することで合意した。また日韓小学生の交流について韓国から打診があり、前向きに検討することになった。

AHF第一副会長、IHF理事とも任期は4年。国際会議や国際試合に出席する機会が多いが、日本チームが活躍してくれないことには肩身が狭い。任期中に日本のハンドボール界が世界に羽ばたけるように微力を尽くしたく思っている。

第52回全日本総合選手権大会
男子は大同特殊鋼が2年連続9回目の優勝
女子はイズミが2年連続3回目の優勝

平成12年度、第52回全日本総合選手権大会は、男女それぞれ国内のトップ16チームの参加で、12月13日から16日まで、広島県立総合体育館グリーンアリーナをメイン会場に、東区スポーツセンターも使用され開催された。

20世紀最後を飾る全日本チャンピオンは、男子は大同特殊鋼が10年ぶりとなる決勝での延長戦の大激戦を制して、2年連続9回目の栄冠を獲得した。女子はイズミが監督兼任のイムを欠きながら、激戦を勝ち抜き2年連続3回目の優勝を果たした。

■最終順位

〈男子〉

優勝　大同特殊鋼
2位　本田技研
3位　湧永製薬、三陽商会

〈女子〉

優勝　イズミ
2位　オムロン
3位　北國銀行、シャトレーゼ

▲男子MVP・大同特殊鋼・白元喆

▲女子MVP・イズミ・青戸あかね

■各表彰者

★最優秀監督賞
男子　末岡政広（大同特殊鋼）
女子　林　五卿（イズミ）

★最優秀選手賞
男子　白元喆（大同特殊鋼）
女子　青戸あかね（イズミ）

★優秀選手賞
男子　ステファン・ストックラン（本田技研）
女子　宮本奈芳美（オムロン）

全日本総合選手権大会を終えて

広島県ハンドボール協会副理事長（広報担当）　山本　一

第52回全日本総合選手権大会は、広島市の県立総合体育館、東区スポーツセンターにおいて男女各16チーム、計32チームが集結し開催されました。

12月12日の審判会議、代表者会議、歓迎レセプションに引き続き13日から16日までの4日間にわたりトーナメント形式で試合が行われました。広島での開催は初めてでしたが、日本協会の指導のもと、前年度大会等の資料を参考にさせていただき、無事終了することができました。

結果は、別記の通りですが、男女とも日本リーグ勢に学生、実業団、クラブチームが挑戦するといった形で、インカレで優勝した男子の大阪体育大学がデンソーファドレスを、女子の筑波大学がブラザー工業を破るといったように、学生の活躍で多少の波乱もありました。しかしながら、終わってみると男女とも日本リーグ勢が順当にベスト4を占めるといった例年通りの結果であったような気がします。

広島におきましては、11月21日から6日間、全日本インカレが開かれ、1ケ月の間に二つの全国大会が開催されるという日程でしたが、1991年のアジア選手権に始まり、アジア大会、国体とビッグゲームを数々こなしてきたこともあって、両大会とも準備から運営まで仕事を分担することで乗り切ることができたと思います。

大会はＮＨＫ－ＴＶの全国放送日時の関係もあって、当初希望していた12月23日（土・天皇誕生日）、または12月24日㈰を最終日とする計画が12月16日㈯にせざるを得なかったことで、大半のゲームがウィークデーでした。しかも、この期間はまだ学校が冬休みに入っていないということで、観客の動員があまりできなかったということは心残りです。

会場は広島県立体育館（通称広島グリーンアリーナ）をメイン会場に、今やハンドボールの本拠地として定着している東区スポーツセンターを使いましたが、グリーンアリーナの立派な施設が観客数が少ないため、充分活用できなかったことも残念でした。地方都市での開催の限界とは思いませんが、少しばかり悔しい思いをしました。

大会の運営については、メイン会場ではタラフレックスも敷き、特設の観客席を出すなど精一杯のことをしたつもりです。また各会場とも㈱モルテンの協力も得て、退場タイマーも1対～2対ずつ設置することで観客へのサービス等も図りました。しかしながら退場タイマーが忙しいくらい活躍したことはほめられることとは言えないと思います。

男子の決勝戦についていえば、ゲーム自体は、大同特殊鋼、本田技研ともに相譲らず２点差になることがなく、１点を争うゲーム。しかも延長戦で決着がつくといった非常にスリリングな試合でした。…が点差だけからいえば白熱した良いゲームといえるのでしょうが、見ているものにとっては爽快感は残らず、後味の悪さの残った試合だったと思います。私はプレーのことは良くわかりませんが、ゲーム開始早々警告、退場があり、このゲームでは両チームあわせると警告５、退場18、失格２という荒っぽい試合でした。レフェリーの技術云々ということもあるかもしれませんが、観客の方はお金を払って見に来てもらっています。この選手のプレー見たさに来場する人もいます。それが会場に入ると、その選手は退場してコートにいない。

また、純粋にハンドボールをしようとする中・高生達にこんなゲームは見せられません。不可抗力の反則はあるかも知れませんが、最高のプレーには反則で対抗するのでなく、最高のプレーで対抗してください。私たちもハンドボールは格闘技的要素もありおもしろいスポーツですといってＰＲしてまいりましたが、格闘技ではありません。関係者（レフェリー、指導者、選手）の心は１つ。日本のハンドボールを盛んにし、オリンピックに出場するという悲願達成のために頑張っていただきたい。最後になりましたが、大会を開催するにあたり、協賛各社をはじめ、男子決勝を中継していただいたＮＨＫ、また後援いただき、大きな紙面で飾っていただいた読売新聞社、中国新聞社等各報道機関に対し、この場をお借りしてお礼申し上げます。

試 合 結 果

【男子】

■１回戦

本田技研	33	14—7 19—6	13	トヨタ自動車
大阪体育大	26	12—11 14—12	23	デンソー ファドレス
トヨタ車体	26	12—11 14—13	24	ケーブルネット 氷見
三陽商会	23	14—4 9—12	16	香川クラブ
湧永製薬	25	16—4 9—8	12	中央大
OSAKI OSOL	24	15—6 9—11	17	アラコ九州
大同特殊鋼	32	20—6 12—5	11	北陸電力

■２回戦

本田技研	25	12—5 13—8	13	大阪体育大

◀男子ＭＶＰ大同特殊鋼・白元喆

［戦評］２回戦第１試合は、大体大のスローオフでスタート。開始早々から本田は、ストックラン、ヴォルのロングシュートで先取点をとろうとするが、大体大ＧＫ吉田の好守にあい、なかなか得点できない。逆に大体大・加藤のミドルシュートが４分に決まり、大体大が先行。その後９分までお互いに点を取り合い、３—３の同点。しかし、ここから本田は本領を発揮、ストックランの３連続シュートなどで、15分過ぎで７—３。16分半過ぎから大体大はストックランにマンツーマンをつける作戦にでるが、時既に遅く、その後に本田は谷口のサイドシュート、加藤の速攻などで加点し、前半終了時には、12—５のダブルスコア以上となってしまった。

サイドを変えた後半、大体大はストックラン、ヴォルの両選手にマンツーマンにつく作戦にでる。しかし、開始早々、谷口のポストシュートで４対４を打ち破る。開始５分まで点の取り合いとなり、16—７。ここで大体大はストックランのみのマンツーマンに変更。その後、本田・谷口の退場の間も互いに点を取り合い、大体大はなかなかペースをつかめない。残り15分で大体大・四宮が速攻を決め、20—10に。このあたりから本田はメンバーを変え、双方ともミスが多くなった。終わってみれば、25—13で、双方とも少し大味な試合であった。

三陽商会	26	17—9 9—6	15	トヨタ車体

［戦評］２回戦第２試合は、トヨタ車体のスローオフで試合開始。開始２分、三陽・中川のミドルシュートが入り先取点。３分中川の７ＭＴを岩本がきっちり決め、開始５分まで２—０。５分半に車体・岩本のミドルが決まったが、その直後、三陽・田中（茂）のミドルが決まり３—１に。その後、トヨタ車体は、３—２—１ディフェンスをとるが、７分に岩本が７ＭＴを決め４—１。その後、三陽・中川の退場の間に、車体・野村のミドルが決まり、追い上げムードでお互いに点を取り合い、開始15分で９—６となった。その後も、三陽は、車体の３—２—１ディフェンスを中川などのカットインで得点を追加、車体は野村のロングシュートで対抗、双方とも攻撃力を全面に押しだし、点の取り合いとなった。トヨタ車体は、３—２—１ディフェンスで三陽商会の攻撃を防ぐことができず、17—９の８点差で前半を終了した。

後半は、三陽商会のスローオフで試合再開。６分までお互いに堅い守りで得点できず、車体・吉田のサイドシュートが入り攻防が始まった。14分半に三陽・岩本、車体・北

出が退場し、５対５に。三陽･田中（将）の速攻で、16分過ぎで21―12となった。車体は、残り12分から三陽・岩本にマンツーマンする戦法にでた。その後、中川にもマンツーマンをつけるが、時すでに遅く、26―15で試合終了。三陽のディフェンス、オフェンスが光った試合であった。

▶優勝・大同特殊鋼

湧永製薬 28（16―7／12―5）12 大同クラブ

［戦評］大同クラブのスローオフで試合開始し、湧永は下川の速攻で先取点を取った。その後、田中のポスト、中山の速攻などで得点を重ね、14分で８―４の４点差にしたが、湧永の下川が退場となり、大同クラブが追い上げにかかった。しかし、地力に勝る湧永製薬が16―７と差を広げ前半を終了した。

後半に入っても湧永製薬の優位は変わらず、また、大同クラブのベテラン勢に疲労の色が見え始め、一方的な試合になった。

大同特殊鋼 25（13―5／12―12）17 OSAKI OSOL

［戦評］ＯＳＡＫＩのスローオフで試合開始。大同は冨本のミドルシュートからの４連続得点や堅い守りなどでＯＳＡＫＩを圧倒し、前半を13―５で終了した。

後半開始２分で大同の白が失格となり、ＯＳＡＫＩが２連続得点などで追いすがる。その後は、お互いに速攻やミドルシュートなどで加点するが、前半のリードを守りきった大同特殊鋼が勝利を収めた。

■準決勝

本田技研 21（11―6／10―9）15 三陽商会

［戦評］立ち上がりから本田技研は谷口のサイドで先取点を奪うとストックランの強烈なシュートや斎藤の速攻などで５点連取しリズムをつかんだ。一方、三陽商会は、本田技研の高いディフェンスと四方のナイスキーピングの前に攻めあぐみ、12分過ぎの中川のミドルシュートまで得点をあげることができなかった。その後、三陽商会は岩本のロングシュートや永島のポストシュート、飯嶋のサイドシュートなどで必死に追いかけたが、肝心なところでストックランのシュートが決まり、本田技研のペースで試合が進み11―６の本田技研リードで前半を終了した。

後半、三陽商会は立て続けに４点連取し、10分過ぎには１点差まで詰め寄った。本田技研は谷口、阿部の両サイドを使った幅広い攻めで徐々に差を広げ、21―15で本田技研が勝利をおさめ、決勝へ駒を進めた。

大同特殊鋼 26（9―9／17―13）22 湧永製薬

［戦評］決勝進出をかけた大事な一戦とあって、出だしから熱のこもった試合が繰り広げられた。大同特殊鋼は朴、白の両フローターを軸に藤井のポストで攻める。一方、湧永製薬はシグルドソン、中山の両フローターからサイド、ポストに展開し、互いに一歩も譲らない一進一退のゲーム展開が続いた。湧永製薬は15分過ぎから大同特殊鋼の退場に乗じてリズムをつかみ、やや試合を優位に進めるかと思われたが、大同特殊鋼も必死に食い下がり、前半終了間際に松林の速攻で追いつき９―９の同点で折り返した。

後半、大同特殊鋼は堅いディフェンスから出足の速い速攻で加点し湧永製薬を突き放す。湧永製薬も必死に食い下がるが、大同特殊鋼のＧＫ荻田が７ＭＴを３本阻止し追い上げをかわした。大同特殊鋼は、要所要所で朴と白が確実にシュートを決めて湧永製薬の追撃をかわし、26―22の４点差で決勝進出を決めた。

■決勝

大同特殊鋼 24（11―12／8―7／（延長）／3―2／2―2）23 本田技研

［戦評］立ち上がりから両チームとも激しい攻防戦を繰り広げ、１対１での体のぶつかり合いや、ポストでの優位な位置取りのための押し合いと、まるで格闘技のような趣で試合が進んだ。両チームＧＫのナイスセーブもあり、なかなか点差を広げることができず、10分で４―４、20分で８―８と一進一退の試合展開であった。両チームとも退場者が出るなど荒っぽい試合であったが、本田技研・ストックランの８得点で12―11と本田技研１点リードで前半を折り返した。

後半に入り両チームとも手堅く試合を進め、20分過ぎに16―16の同点となる。本田技研・ストックラン、ヴォル、大同特殊鋼・朴、白の両エースのシュートの打ち合いから緊迫したムードで試合が進んだ。残り５分で17―17の同点から大同特殊鋼・白などのシュートで19―18となり、残り１分を切り大同特殊鋼が逃げきると思われたが、本田技研・佐々木のシュートで追いつき後半が終了した。

延長戦に入り、本田技研・ヴォル、大同特殊鋼・朴ともに失格となり、両選手ぬきの試合となった。本田技研・谷口、大同特殊鋼・峯村がともに2得点をし、試合を沸かせた。残り3秒、大同特殊鋼・白のシュートが決まり、劇的な勝利をものにしたのは大同特殊鋼であった。

【女子】

■1回戦

		前半	後半		
イズミ	25	13—12	12—11	23	熊本クラブ
ソニー国分	35	15—8	20—9	17	ムネカタ
筑波大	20	8—10	12—9	19	ブラザー工業
北國銀行	24	12—5	12—7	12	国士舘大
オムロン	27	12—2	15—4	6	茨城大
日立栃木	28	13—12	15—5	17	宮城ケヤッキーズ
シャトレーゼ	29	13—7	16—5	12	香川銀行T．H
立山アルミ	25	13—5	12—7	12	東京女子体育大

■2回戦

		前半	後半		
イズミ	32	18—7	14—7	14	ソニー国分

［戦評］イズミは、立ち上がりからベストメンバーで、呉選手を中心に絶妙なパスワークを、ポスト橋詰選手が確実に好捕し、手堅く3連続得点、前半10分間は完全にイズミペースとなり、7－1とする。以後、お互いオフェンスミスが続き、中盤は点の取り合いになった。しかし、地力に勝るイズミは、守って速攻でペースを取り戻し、食い下がるソニー国分を引き離し、イズミは18—7で前半を終了した。

後半に入っても、イズミの速いペースは衰えず、ソニー国分も多彩に攻めるも、イズミのディフェンスに割り込めず、なかなか得点できなかった。中盤からソニー国分は、若さあふれるプレーで、イズミの攻撃ミスを確実に得点するが、大勢を変えるまでに至らなかった。終わってみれば、イズミの大勝に終わった。

		前半	後半		
北國銀行	18	10—4	8—6	10	筑波大

［戦評］筑波大は立ち上がりから良く動きチャンスをうかがうが、北國銀行の堅いディフェンスをなかなか崩せず、得点をあげることができなかった。対して北國銀行も小さなミスがあり、なかなか差を広げることができなかったが、相手の退場に乗じて得点をあげ、前半を10—4の北國リードで終えた。

後半に入ってもこのペースは変わらず、筑波は山田(永)のミドルシュートなどで挽回しようとするが、結局単発的になってしまい、差を詰めることができなかった。北國は、最後まで足がよく動くディフェンスが続いたことが勝因といえる。

◀女子イズミ・活躍したGK高森妙子

		前半	後半		
オムロン	21	12—7	9—8	15	日立栃木

［戦評］立ち上がりから両チームとも動きがよく、接戦となった。常にオムロンが先行し、日立が追いかける展開で16分には一度は日立が同点にした場面もあったが、その後オムロン佐久川のサイドシュート等で連続得点し、GK山口の好守もあり12—7の5点差で前半を終えた。

後半、日立も懸命に追い上げようとするが、大事なところでシュートミスなどが目立ちオムロンの速攻などで逆に点差を広げられてしまった。試合を通してミスの多い、少ないで勝敗が決したと思われる。

		前半	後半		
シャトレーゼ	26	14—6	12—8	14	立山アルミ

［戦評］立ち上がり、両チームとも決定的なチャンスを迎えたが、両キーパーのナイスセーブに阻まれなかなか得点が奪えない。4分過ぎ、シャトレーゼはサイド、速攻、ミドルと多彩な攻めで5連取し完全に主導権を握った。立山はイージーなシュートミスやディフェンスの甘さから自滅した。攻めの形も単調で、なかなかシュートを決めることができず、前半は14—6の一方的リードで折り返した。

後半もシャトレーゼの早いリズムは変わらず、次々と加点しリードを広げていく。立山は中塚に頼りすぎで、ボールの展開が悪かった。シャトレーゼは終了まで攻め手を緩めず、次々とシュートを決め、キーパーのナイスセーブもあり失点も14点に抑え、26—14で圧勝した。

■準決勝

		前半	後半		
イズミ	25	15—6	10—14	20	北國銀行

［戦評］前半、スタートはお互いにセットからボールを回し、シュートを狙う静かな立ち上がりとなった。北國は6分までに何度かノーマークシュートのチャンスをつかむが、イズミGK高森の好セーブが続き、2－4と苦しいゲーム展開となる。なかなかリズムがつかめない北國は10分過ぎから、イズミのエース呉にマンツーマンディフェンスを仕掛ける。しかし、フリースローからボールを回すイズミの

攻撃を防ぎきれず、15分には3－8とリードを許してしまう。その後も北國はリズムをつかめず、イズミの6－0DFを崩すことができない。北國はたまらずタイムアウトをとる。その後、お互いに得点を重ねるが、ペースをつかんだイズミが15―6とリードを広げ前半を終える。

▶優勝・イズミ

後半、北國は変わらず、イズミの呉にマンツーマンDFを仕掛ける。また、相手のミスからの速攻で2連続得点し、良いスタートを切った。その後、北國は高めのDFを仕掛け、イズミの攻撃の足がとまり始めた。攻めあぐむイズミとは対照的にロングからポストのパスワークや速攻などで得点を重ね、17分過ぎには5点差までつめた。消極的な攻めが再三見られ、ペースのつかめないイズミは、19分過ぎ、タイムアウトをとる。22分過ぎ、イズミ青戸の退場をきっかけに北國は速攻などで得点を重ね、24分には3点差まで追い上げる。しかし、イズミもスピードあるパス回しで地力を発揮し得点を重ね、追い上げる北國を振り切った。

オ　ム　ロ　ン　23（10―5 / 13―9）14　シャトレーゼ

［戦評］試合開始2分の間にシャトレーゼは、阿部のロング、大石の速攻で得点した。一方、オムロンは佐久川のシュートで2－1とし、点の取り合いかと思われたが、オムロン山口、シャトレーゼ遠藤両GKの好守で一進一退の試合展開となった。18分過ぎからオムロン山下のロングシュートなど、3連続得点でオムロンが試合のペースをつかんだ。シャトレーゼも多彩な攻撃を仕掛けるが、オムロンGK山口の再三の好守が光り、10―5で前半を終了した。

後半に入りオムロンは隅のカットインなど3連続得点し、リードを広げた。後半10分までに19―8と大きくリードした。シャトレーゼの攻撃は阿部の孤軍奮闘という感が強く、なかなかオムロンの壁を破れない。逆にオムロンは好調のGK山口を吉田に変える余裕を見せ、23―14でオムロンが圧勝した。

■決勝

イ　ズ　ミ　25（14―11 / 11―13）24　オ　ム　ロ　ン

［戦評］世紀末、第52回全日本総合ハンドボール選手権大会女子決勝戦は、前回優勝イズミと2年ぶりに決勝に進出したオムロンとの顔合わせになった。開始早々イズミは、呉からのポストパスを橋詰が決め先取点を奪った。ディフェンスの堅さでは定評のオムロンではあるが、守りのリズムがなかなかつかめず、7分過ぎには4－0とされた。その後オムロンは相手ミスを手堅く得点に結びつけ7－6と1点差まで迫った。ここからは一進一退の攻防が続いたが、イズミの呉を中心とした攻撃が一歩上回り、前半を14―11の3点差で折り返した。

後半、オムロンは高いディフェンスで、イズミの攻撃を分断する作戦に出たが、イズミは全員がよく動き広瀬のミドルシュートなどで得点を重ね、序盤はイズミのペースで試合は進んだ。しかしオムロン山下のミドルシュートが決まり始め、GK山口の好キープからリズムを取り戻し13分には19―19の同点とした。イズミはすかさずタイムアウトをとり、流れを変えようとしたが、逆にオムロンの攻撃のリズムが良くなり、20分には24―21と3点リードされた。その後オムロンは得点することができず27分に同点に追いつかれ、残り10秒でイズミ川村のシュートが決まり、イズミが劇的な勝利をものにした。両チームとも持ち味を十分に発揮した決勝戦にふさわしい好試合であった。

コーチ・ヘッドレフェリーシンポジウム2000
（ナブール・チュニジア）

「開会基調講演」

キャルタン・シュタインバッハ
（国際ハンドボール連盟競技規則・審判委員長）
翻訳：光島礎雄

再びシンポジウムの年となり、ここでみなさんとお互いに経験や意見を交換して研修の成果をあげるために、ＣＣＭ（技術委員会）とＰＲＣ（競技規則・審判委員会）が共同歩調をとり、ハンドボールが世界的スケールでおもしろくて魅力あふれるものとなることを心から願う次第である。

このシンポジウムの真の目的は、レフェリングとコーチングの技術と見識を向上させるとともに、人気・魅力に富むハンドボールを実現することにある。

２年前にオーストリアのリンダブルンでのシンポジウムで、次の４年間への到達目標についてお話したが、その中ではいくつかは実現し、いくつかは未解決のままのものもある。今回ここで未解決となっていることについて、たとえば長年にわたって論議されてきたルール改正の件もそのひとつである。

1997年発行のルールはいま世界中で実施されているが、依然としてその適用と解釈には不明瞭で徹底を欠く点があると思う。我々としては、将来ルールがレフェリーにとってはもちろんのこと、トレーナー・プレーヤー・観客にとっても容易に理解できるようなものにしなければならぬと考えている。

このルール改正に関して各方面から寄せられたアイデアを紹介する。改正ルールブック発行は2001年８月に予定されている。みなさんはここで概略を知ることになるが、各所属国での討議の資料として持ち帰る重要な任務役割を果たしていただきたい。

このルール改正作業グループとしてＰＲＣからクリスター・アール（アメリカ）、マンフレート・ブラウゼ（ドイツ）、ロジャー・ソーノー（ベルギー）、ＣＣＭからディートリヒ・シュペーテ（ドイツ）、ロマン・セコ（スペイン）、ＣＯＣ（競技委員会）からエリック・ラーセン（デンマーク）の諸氏が各方面からの提案資料整理を担当した。

各方面への情報収集のための質問や要望事項への回答で、我々は多くの貴重な示唆が得られたことに深甚の謝意を表明したい。

これらの質問と回答内容はすべての加盟国へ送られ、その国のトップレベルのトレーナーやＩＨＦレフェリーの意見・見解を求めることも要請した。非常に興味深く感じたのは、これらのルール問題についての意見・見解が、人により、国により、地域によって極端な相違が認められたことである。これについてはのちほど詳細に説明される。

これらのことを踏まえた上で、みなさんに２年前お話したことの再度繰り返しをお許し願いたい。

ＩＨＦ管轄の主要大会へベストレフェリーを派遣することについて

ベストレフェリーを常時世界選手権およびオリンピックに指名し派遣できるようにすることは、長年にわたる重要な到達目標である。もちろんこれは試合運営管理能力やルール知識・体力面・理論面のテストそして中立性やスポーツマネージメントに優れた適性に相当する持ち主でなければならない。

エジプトでの男子世界選手権大会では、大会運営側からＰＲＣへの無理強いとも言える要請で、準々決勝後のレフェリーペア数を16から８に削減させられたが、この事態の収拾についてＰＲＣは独自の評価査定基準の必要を認めるに至ったのである。

これは容易にできることではないが、私自身の考えでは、この段階のレフェリーに最後まで滞在を認めるべきで、この滞在中にハイレベルな試合観戦を通じて研修の場を与える方が将来的に有益である。なんとなれば、従来決勝ラウンドに選ばれないレフェリーは常に経験数の多い少ないが問題にされることがあったからである。このことは今度の中国とカタールで行われるジュニアの世界選手権大会でも同様の事例となるであろう。

ここに極めて重要なことがひとつある。我々にとっては現在３大陸からそれぞれチームを出すことと、同じ３大陸から１ペアのレフェリーを義務的に受け入れる問題を抱えている。問題は、果たして世界選手権大会でベストなレフェリングが保障されるか？　ということである。ゆくゆくは男女の世界選手権大会でのレフェリー人事について部分的に変更を加えることと、ジュニア部門では現行のシステムで経験数を増やせるようにすることが議論主題となるであろう。

ＰＲＣはすべての大陸連盟のレフェリー研修活動を援助する

ＰＲＣはこれまでそこそこの研修課程を援助した実績がある。

ＩＨＦの他の委員会と密接に協力体勢を確立すること。

ここにひとつの重要課題がある。みなさんがすでに知っている通り、五つのＩＨＦ常設委員会は２回の合同会議を開いて、１回目は２年前にオランダで、そして本年はローザンヌで実施された。この会議を通して相互の任務理解が進んだと言える。これは将来も続けられるであろう。

ＩＨＦは公認レフェリー有資格者の数をコントロール（減らす方向）する

我々の任期はじめの時に表明したが、ＩＨＦは有資格レフェリーの数を現実の状態に――有資格レフェリーのほとんどはＩＨＦの試合に関わることもないし、また関わろうとする意志もない――合わせて減らすかまたは抑制する方向を選びたい。

言うなれば、現在の有資格者の大部分はその「ワッペン」をただのステータスシンボルとして使っているとしか考えられないからである。

到達目標は数量ではなく質的充実と考えてもらいたい。

今後の女性レフェリー登用を推進すること

ＰＲＣはこれまでヨーロッパ連盟やパンアメリカン連盟と連携して女性レフェリーの登用促進に多大な努力を傾けてきたが、1999年には二つの混合（男女）ペアに加えて三つの女性ペアが中国やノルウェーでの女子世界選手権大会に指名され、ついにはオリンピックにも指名されるまでに進歩を示した。

しかし、今後は女性を特別扱い（昇格や指名）する措置はとられないので、女性は男性と同じ条件で競争することになる！

レフェリング観察評価表について

数年前に新しく観察評価表が紹介されたが、ＰＲＣは今回この観察評価表に若干の修正と追加されたものを紹介する。

総括・要約として

はじめに触れたように、今回の主要テーマはルールの改正の可能性とその発展性についてである。

今後このＩＨＦのグループディスカッションに積極的に参加して上記の事柄についてみなさんの忌憚のない意見を聞くチャンスを与えていただきたいとお願いする。

みなさんの建設的な意見なしでは、われわれの作業は困難をまぬがれない。保守的かもしれないが、当方としては決して急激な変化・進展を望んでいるわけではない。そしてなおのこと忘れてはならないのは、ルールはすべてのハンドボール愛好者のためのものであるということ！　最終的なねらいとして我々は、エリートレベル・ジュニア部門・ビーチハンドボール、そしてチャイルドハンドボールなどそれぞれに適したルールづくりに精進するべきと考える。

ＰＲＣとＣＣＭとＩＨＦを代表して、みなさんがここで十分に研修を積んだ成果を自国に持ち帰って有効に活用されるよう心から願ってやまない次第である。

この機会を設けていただいたチュニジア協会の尽力に心からお礼を申し上げる。

このシンポジウムの日程が終わるころには、全員同じ意味のことを共有できるよう期待し確信する次第である。

ご静聴感謝します。

ゲームの運営方法
―次世紀のレフェリーに求められるもの

ハッサン・ムスタファ（CCM委員長）
翻訳：福島亮一

世界のハンドボールの傾向

レフェリーの任務や役割、機能について詳しく見つめる前に、スタートとして大切なことは、近年のハンドボールに起こった変化や発展について見つめ直すことであろう。

世界のハンドボールで明らかに増加傾向にあるものは、次のようなものがあげられる。

・1980年代では、１試合の平均攻撃回数は、チームあたり40回であったが、今日では平均50回が普通になってきた。1995年の世界選手権でベスト８に入ったチームの平均は、

52.6回であった。

・その結果、得点も多くなった。1997年の世界選手権では、1チーム1試合平均26.2ゴールであった。

・速攻における得点は、はっきりと増加傾向にあることがわかる。1997年の世界選手権では、得点の24.5%は速攻によるものであった。スウェーデンのようなトップチームは、得点の⅓は速攻によるものであった。

攻撃ばかりでなく、防御においても同様に変化が見られる。防御の型はチームによっては基本的なものが決められているようなものであるが、トップチームはあたかも攻撃のフォーメーションのように、積極的な動きでディフェンスシステムを変えてくる。最近の国際試合では、エジプトやチュニジアやアルジェリアのような、ヨーロッパでないチームにおいて、マンツーマンのような攻撃的な防御への変化が見られるようになったのも事実である。

個々のプレイヤーの技術も近年上達してきた。サイドプレーヤーは芸術的なシュートのレパートリーが増えた。バックコートのプレイヤーは、オールラウンダーとしてどのポジションでも効果的な動きをすることができる。ゴールキーパーにおいても位置取りのかけひきのうまさなど多くの変化が見られる。体格や動作における基本的な要求が高まってきたおかげで、見応えのあるプレイの数々が話題になってきた。

これらのプレイの発展が、世界のハンドボールのランキングの変化と付随して起こっている。

過去、たとえばヨーロッパ以外のチームには、勝利のチャンスはほとんどなかったが、最近の結果に表わされているように、技術の発展にともなって、匹敵する力を持つようになってきた。世界のトップレベルのチームは増えており、1980年代のソ連のような最高峰のチームはもはや存在しなくなった。「だれでもトップになるチャンスはある」世界のハンドボールにおけるプレイヤーの動作の国家間の差は非常に縮まっていると言ってもいい。

練習の機会・試合数の増加

これらの発展に貢献しているものは、明らかに練習の機会の増加であろう。トッププレイヤーは一日に2回は練習している。さらに過激な変化は、練習試合の数の増加である。今日のナショナルレベルのプレイヤーは、1年間に100試合以上消化している。

幅広い科学的な動きの分析と練習管理

今日の多くの練習やプレイは、科学的に分析されたものを基盤としている。たとえば、スピードやジャンプや筋力などのトレーニングは、分析をもとに能力の高い若いプレイヤーの段階からすでに始まっている。全体として、スポーツ科学の研究に基づいた練習の管理が見られる。

プロスポーツへの発展

ハンドボールに携わるアマチュアプレイヤーは、仕事を抱えている上に職業上の訓練などもあり、近年増加しているトレーニングにかかる費用を支払うこともできないことが事実としてあげられる。ハンドボールはサッカーのような経済的に支援されたスポーツには近づけないので、プレイヤーは職を失いそうになるまでハンドボールに集中しない限り、最高のプレイヤーにはなれないであろう。トップレベルのコーチは、練習やプレイの管理、チームの管理、PR活動など、必要とされる条件が満たされるならば、プロの監督として位置づけなければならない。

一般的にハンドボールは、どの国においても経済的に苦しい状況であろう。市場での取引の状況や、スポンサーの存在、予算などは、運営の成功に大きく左右する。多くの国において、ハンドボールは昔も今も、自分で予算のやりくりをすることが多く、大会へは「レジャー」として参加しているようなものである。その結果、プレイヤーやコーチには多くの負担がかかっている。

メディアの注目の増大とその有効性

この10年間で、メディアのハンドボールに対する注目度は、疑いもなく変化している。ハンドボールに関する幅広い報告は、ほかのメジャーなスポーツと間違えてしまうほどで、今日の発展にもある意味では貢献していると言えよう。一方、注目度が増大したがゆえに、ハンドボールというスポーツ全体やそれに含まれる協会・連盟・コーチ・プレイヤー・レフェリーは、批判的に取り上げられることが多くなってきた。テレビなどでプレイヤーを目にすることが多くなってきた今だからこそ、ハンドボールというスポーツを見つめ直すことは大切である。

レフェリーの発展は何か？

今日、私たちには多くのトップレフェリーがいる。しかし、多くの国では、レフェリーの発展や昇級やトレーニングをどのようにしているのだろうか。

・レフェリーの選択は、「消極的な選択」として考えられているが、クラブチームや協会の関係者で、プレイヤーやコーチにおいて成功しなかった人が、よくレフェリーになるようにすすめられる。さらに悪いことに、多くのレフェリーにはハンドボールのプレーヤーとしての経験が少なく、ゲームの理解や戦術についていけないことがある。

・多くの国において、レフェリーのトレーニング量が不足している。トレーニングを十分に積んだ上に理論が存在する。せいぜい年に1～2回の割合でさらに進んだトレーニングが求められる。

・トップレフェリーは、継続的にトレーニングに参加している。練習試合で個人的にレフェリングをして練習することもあるが、時として間違ったルール適用をしている

こともある。

・さらなる欠点は、すでに述べているが、今日のプレイヤーは1年間に100試合以上を消化しているが、レフェリーにはそのような長期的な機会が恵まれていないことである。熟練したレフェリーになるためには、十分な経験の場が不可欠である。

コーチやプレイヤーがトップにたどり着くための努力量と、レフェリーの努力量は違う。多くのレフェリーは、プロではないので、このことは当たり前のことだと指摘する。そのほとんどが、自分の家族や自由時間を犠牲にしている。

しかし、それで十分なのか？

ハンドボールは、メディアの中で他の種目と競合している。魅力的なプレイには高い質のレフェリングが要求される。さらに、ルールの解釈が幅広いスポーツにおいて、レフェリーが、プレイの質や魅力をどのように感じているかが大きく影響する。

しかしながら、将来の期待に応えるためには、私たちは、レフェリーの質をもっと高めなければならない。

2000年のレフェリーに要求されることは何であろうか。

2000年のレフェリーに要求されるもの

近年のレフェリーに求められるもっとも重要な点をあげている。

1．ルールの専門知識は基本的な条件である。必要な「道具」としてレフェリーは身に付けてなければならない。

2．ルールや戦術に精通していることが、レフェリーに求められる。試合における戦術の知識を持つことも必要である。試合の状況を予測すること、戦術的な側面から状況を「読む」こと、観察の視点に基づいて、集中して注意力を働かせること、このことが正しい判定をすることにつながってくる。このような方法が、レフェリングをより完成させることにつながるであろう。

ルールや戦術に関する初期や進んだ段階でのトレーニングは、補助的な役割を果たす。レフェリーの動きはとても進歩してきているが、コーチとレフェリーは、ここ最近、ＩＨＦが行っているシンポジウムのように、お互いに協力して意見交換をしていくことが発展につながっていく。

3．身体的コンディションが備わっていることは、言うまでもないことである。集中力を維持するための高い持久力は、言うまでもなく、そのコンディションの中に含まれている。

4．走ったり動いたりしながら良い位置を見つけることは、試合中に起こりうる場面を的確に判断できるために、とても重要である。プレイのスピードがとても早くなってきているので、この能力は将来注目すべきものになるであろう。

5．世界のハンドボールのレベルが高くなり、プレイヤーやコーチの経済的な負担が高くっている中で、緊張に打ち勝つことを含めた精神的な安定がレフェリーにとって不可欠なものになってくるであろう。トップレフェリーは、大きな大会に向けての準備には、この点においてもトレーニングされるべきである。安定した精神状態における認識力は、試合の場面を判断する際に必要とされる。レフェリーは、コート半分で行われているディフェンス全体や、シューターへの接触といった狭い範囲に至るまで、正しく知覚できるような位置取りをすべきである。

6．レフェリーは、次のような機能的な体制が整っていれば、これまでに述べた要求に到達されるであろう。
・継続的な初歩的あるいは発展したトレーニング
・満足のいくトレーニング環境（トップチームの練習に参加したりする）
・適当な日当（サッカーを例に）

7．トップレフェリーとして、もっとも大切なのは、人間性を高めることである。レフェリーには、自己満足も大切であるが、自己認識もまた大切なものである。時には、荒れた場面に、選手を落ち着かせたり、話しかけたりすることも必要である。良いレフェリーは、批判は建設的に受け止め、自分のものとして取り入れていくことができる。レフェリーとしてのほかの能力も、この人間性がもとになるであろう。

この点において強く言えば、本当のレフェリーの人間性は、プレイヤーやコーチ、観客に受け入れられるものであ

り、試合にとって不可欠なものとなる。

では、私たちはどのようにして、レフェリーにこれらの要求を満たしていけばいいのだろうか。

効果的なレフェリングのための要素

以下に６つの要素をあげている。

1．プレイヤーまたはコーチとしての経験は、ルールや戦術の理解につながり、プレイを的確に判断するためにも不可欠である。

2．一般的に、早い段階からレフェリーとしてスタートさせるべきである。国によっては「若手レフェリー」として、若いうちから採用しているところもある。優秀な人材を早めに育成していくことである。ＣＣＭは、ＩＨＦに対して、有望なレフェリーをＩＨＦが確保し、たとえば世界選手権等でトレーニングを積ませることを提案している。良いレフェリーは、何年もかかって、困難な「山」を乗り越えてきている。有能なレフェリーは、なるべく早く経験を積ませることである。より早い進歩が自信につながるであろう。

3．レフェリーは、常にいいコンディションであることが当然である。１週間に３～４日のトレーニングや時期を絞った集中的なトレーニングが求められる。各国の協会は、プレイヤーとレフェリーの双方が数多く経験を積むことができるように配慮しなければならない。このような基盤ができると、トップレフェリーの育成のための各国独自のシステムが完成していくだろう。

4．多くの国では、レフェリーの登用の仕方が１年間で不定期である。プレイヤーにとっても定期的な試合の機会が重要であると同時に、レフェリーにとっても月に４試合程度の割合で経験が必要である。有望であると確保されたレフェリーには、コーチやトップレフェリーなどの良き助言者が必要となってくる。助言者は、レフェリーサイドに立って、試合ごとのアドバイスをする。

5．トップレベルのレフェリーは、試合を通して実際のレフェリングのトレーニングを積むべきである。クラブチームの練習や、選抜チームの練習に参加することが、良きトレーニングとなる。同時に、コーチやプレイヤーとのコミュニケーションが図られ、メンタル面での良きトレーニングの場ともなる。

6．国や国際連盟は、より進んだレフェリーのトレーニングの場を設定しなければならない。新しいシーズンや世界選手権の前では、トレーニングの計画を立てるべきである。チームにとっての事前の調整と同じように行われればいい。これには、多くの出資が求められるが、プレイの発展には当然必要である。

レフェリーは、自ら積極的により進んだトレーニングの場を求めていかなくてはならない。将来的には、コーチングのトレーニングも必要となってくるであろう。このようにして、ルールやゲーム戦術を高めていけばいいのではないだろうか。

まとめ

専門的な知識、試合についての理解や人間性が、プレイヤーやコーチ・観客から多大な信頼を得るために、これからのレフェリーに求められるであろう。

将来のレフェリーには、機能的な体制のもとで、トレーニングしていくことが絶対的に必要である。レフェリーの役目は、ハンドボールのＰＲ活動にとってとても重要な位置を占めていることを再確認したい。レフェリーに対する消極的な見方（まだいくつかの国で見られるが）は、なくすべきである。レフェリーは、試合の中で見られる魅力あるプレイを作り出す、的確なパートナーとして認められなければならない。

だからこそ、レフェリーに対して、自分のレフェリングにもっと責任を持つべきであると主張したい。明らかにハンドボールが発展している傾向の中で、レフェリーはプロとしての認識や義務感が必要である。

次世紀のレフェリーは、高いレベルに到達すべきである。私たちは（レフェリーとして、あるいはコーチとして）機能的な体制を作り出すべきである。そうすることが、高いレベルに到達し、試合の質をより興味深いものにしていくであろう。

平成12年度 高松宮杯
男子第43回・女子第36回 全日本学生ハンドボール選手権大会
男子は大阪体育大学、女子は筑波大学に栄冠

高野 修

平成12年度高松宮杯男子第43回・女子第36回全日本学生ハンドボール選手権大会が平成12年11月21日から26日の6日間、広島県立総合体育館（広島市中区）並びに広島市東区スポーツセンターを舞台に全国の8連盟及び東西インカレを勝ち抜いた精鋭男子32校、女子24校の参加を得て開催された。

広島では昭和39年以来、実に36年ぶりのインカレ開催、また、20世紀最後の大学チャンピオンを決定するインカレ、翌月に全日本総合の開催を控えハンドボール熱が高まる広島での開催と様々な形容詞が当てはまり、今大会はその形容に相応しい熱戦が展開された。

男子の戦前の予想では、昨年度の覇者であり、全日本学生選抜メンバーを中心に攻守ともに安定しており、このインカレも決勝までは確実と思われた男子日本体育大学がベスト8で姿を消す波乱がおきたが、西の王者大阪体育大学が2年ぶりの優勝を。女子は大会3連覇を目指す筑波大学が学生界では向かうところ敵なしといった安定した戦いで優勝をさらった今大会を振り返ってみる。

《1回戦》

各ゾーンとも順当にシード校が勝利をおさめる中、男子では粘り強いディフェンスから速攻を繰り出す桃山学院大が順天堂大を破り、女子では強豪日本体育大を逆転で破った天理大の健闘が光った。また、1回戦屈指の好カードであった、男子筑波大学と福岡大学の一戦は今年春に関東リーグで2部降格した筑波大学が後半12－4と福岡大を一蹴し、見事復活を飾った。

《2回戦》

女子はシード校が登場、各チームとも順当に勝利を飾り3回戦にコマを進めたが、関西勢同士の戦いで武庫川女子大に惜しくも敗れた大阪体育大、また、近年台頭が著しく、大阪教育大を延長戦にまで持ち込んだ東北学連代表の東北福祉大の健闘が光った。男子も順当にシード校が勝ち上がる中、東海の雄で今大会も上位進出が期待されていた名城大が早稲田大に大差で敗れる波乱があり、昨年同様ベスト8を、関東勢6チームが占めるという東高西低の傾向となった。

《3回戦》

男子は優勝候補筆頭と目されていた日本体育大が筑波大に敗れる波乱。延長にまでもつれ込んだ一戦は、日本体育大が最後まで爆発的な攻撃力が影を潜め、苦し紛れのシュートをことごとく筑波大の守護神、千石に跳ね返され、ミスを筑波大が着実にものにした試合であった。他、関東リーグの覇者、中央大が東海の強豪、中部大学を一蹴、日本大も関東対決を競り勝つなど、男子では唯一、鉄壁のディフェンスを誇る大阪体育大がベスト4入りを果たした。女子は、関東勢対関西・九州の戦いとなった3回戦。王者筑波大以外は接戦であったが、ことごとく関東勢に軍配が上がり、筑波大、国士舘大、東京女子体育大、茨城大とベスト4全て関東学連勢で占められた。

《準決勝》

4日目、大会もいよいよ大詰めを迎え、男子は筑波大―中央大、日本大―大阪体育大が行われ、両試合とも2点差で勝敗を決した白熱した戦いであったが、関東リーグを制した勢いをそのまま持ち込んだ中央大と2年ぶりの優勝を狙う大阪体育大が接戦を制した。女子はお互い手の内を知り尽くした相手との戦いであったが、筑波大は前半から国士舘大を圧倒、後半詰め寄られたが余裕の勝利をおさめ決勝進出、一方、東京女子体育大と茨城大の試合は第二延長までもつれ込む熱戦、終始茨城大のペースであったが、集中力を切らさず、粘りを見せた東京女子体育大が勝利をおさめた。

《決勝》

男子決勝戦は中央大と大阪体育大学との一戦、両チームとも出足が固く、様子を探る展開、前半6－5のロースコアで終了、後半に入り、前評判通りの力を発揮したのが大阪体育大で、エース東を中心とした多彩な攻撃力と高さと安定した6－0ディフェンスからの速攻を軸に実力を発揮、後半9－4と中央大を寄せつけず、2年ぶり8回目の学生王座についた。

女子は3連覇を狙う筑波大と東京女子体育大との戦いであったが、攻守ともに安定し、どこにも死角が見当たらない筑波大が序盤から東京女子体育大を圧倒、前半13－5とほぼ試合を決定づけた。後半、猛攻を見せた東京女子体育大ではあったが、筑波大は世界学生選手権得点王のエース山田を中心に余裕の試合運びを見せ、関東リーグ、東日本、今大会と3冠を昨年度に引き続き達成した。

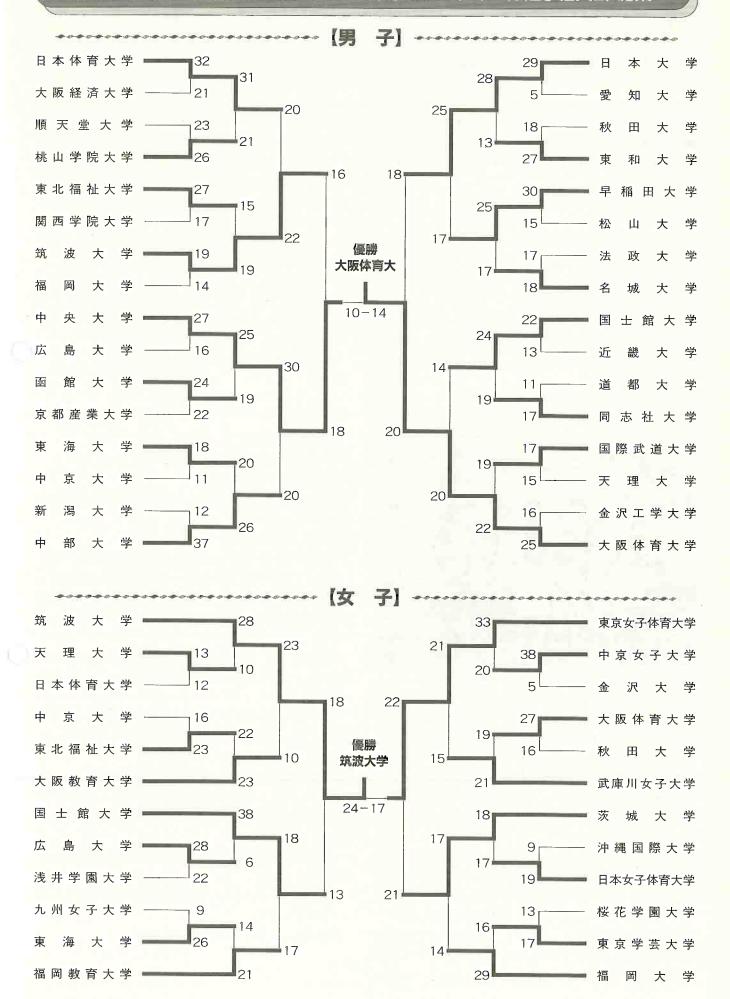
《総括》

5日間に渡る熱戦は、20世紀最後を飾るに相応しい熱戦の中、男子大阪体育大、女子筑波大の両チームがタイトルを手中にし、大きな事故、怪我もなく、無事終了した。

競技運営に関しても大きなトラブルもなく、学連主体の運営の中、運営についても、ゲームについても、学生らしさが発揮されたとてもすがすがしい大会であったように思える。

最後に、大会運営において、全日本学連をはじめ、中四国学連ならびに広島県・市ハンドボール協会、各後援団体、協賛各社並びに大会を支えていただきました審判員・大会役員の皆様、会場に足を運んでいただきましたハンドボールファンの方々に感謝の意を表しまして、報告とさせていただきます。

高松宮杯 男子第43回・女子第36回 全日本学生ハンドボール選手権大会・結果

小学生チーム活動特集

12月号に引き続き小学生クラブの活動報告をいただきましたのでここにご紹介いたします。

■仏生寺スポーツ少年団女子ハンドボール部(富山県)

①団体名・指導者名

仏生寺スポーツ少年団女子ハンドボール部　　林　外美

②団員数

全校生徒は60人で、男子36人、女子24人の小さな学校です。

そのうちハンドボール部員は、2年：1人（6年におねえちゃんがいるので入っている)、4年：2人、5年：7人、6年：5人の15人です。

③団体発足の経緯

昭和52年に仏生寺小学校に勤めました。この年、私は教職員（富山）チームで国体に出場（卒業してからも一般でしていました)。

翌年、分校へ若い先生が来られ、子供達にハンドボールを教えてみないかと、始めたのがきっかけでした。

④指導にあたって特に留意されている事項

まず、ハンドボールを好きにさせること。特に3、4年生には楽しみながら、基礎をしっかり身につけさせ、よくほめてやる。5、6年生になったら、技術面はもちろんですが、精神的に強くなってほしいです。

⑤地域社会・学校との連携やかかわり方について

小学校に入学した時から、3年生ぐらいになると、男子は野球、女子はハンドボールと思っているようです（全員が入部します)。

10年ぐらい前までは、5、6年生がクラブに入部していましたが、子どもが少なくなってきた5～6年前ぐらいから、4、5、6年（男子は野球、女子はハンド）に入部し、夏休みには3年生も体験入部し、週2回ほど練習します。

地域の方々も応援してくれますし、保護者の方々も協力的、学校も児童クラブ（スポーツ少年団ともいう）には、大変励ましてくれるので、指導しているものには、大変やりやすいです。

⑥ある日の練習メニュー

午後4時半から練習です。私は5時すぎ（5時20分ぐらい）に行きます。7時頃まで、月～土まで毎日練習します。

大きな学校と違って、全員がハンドボール部員、全員が選手なので、日曜、祭日以外ほとんど毎日練習ですので、卒業するころにはボールさばき、1日3試合をこなせる体力は十分あります。

5分間走
準備体操
基礎（ダッシュ、ターン、ジグザグ、バック、その他）
パス（ロング、バウンド、ラティラル等）
三角パスまたはランパス（全部で連続30本）
休憩
シュート（サイド、45度、ロング）
1対1
2対2（サイド側）
4対4か5対5のミニゲーム

⑦他の団体指導者への助言等

指導者への助言はありませんが、他の県の人たちと練習試合がしたいです。

⑧その他、今後の目標等

「1人でしか遊べない」「自分さえよければよい」の子どもが増えている中で、チームワークの大切さ、友達とのつながりを深め、規則正しい生活習慣の形成、そして、保護者や、地域の人々に感謝する心を育てていきたいと思っています。

全国大会へは、連続12回出場し、準優勝（過去に5回）まではいくが、1回は夢（優勝）を子供達といっしょに見たいです。

ハンドボールを通して、子供達が夢をもち、たくさんの友達ができ、礼儀正しく、健康な体をつくるのに役立ってくれたらと思っています。

楽しい事ばかりでなく、悲しい時、情けない時、いつも子どもといっしょに味わいました。でも父兄、先生方、地域の方々のご協力、ご支援をいただき今日までやってこれました。

子供達は先輩を見ているので、必ず閉会式に残りたいと言います。

恩返しは、メダルをもって元気に帰って来ることと、いつも思っています。

最大の悩みは子どもがいないことです。

・人・物・登・場・～そのとき活躍した人々～

今号より「ＯＢ登場!!」が装い新たに再登場します。
さて今回登場いただくこの人は…

村中　明郎 さん

（昭和11年7月8日生）

大阪の名門、豊中高校で国体を制覇。関西学院大に進学、芝浦工大と幾度もの激闘を繰り広げた末に4年次で悲願の日本一を達成。その後、当時大阪に拠点の在った湧永製薬の監督を務め、数多くの名選手、指導者を輩出した。現在東京都日野市に在住。（株）メディックス取締役。

ハンドボールとの出会いについて教えて下さい。

人生はその時々の出会いによって大きく変わっていくものですが、私にとっての最初の大きな出会いは昭和23年、豊中の大池小学校6年生のとき、担任が遠藤信三先生だったことです。先生は学生時代大阪学芸大学のハンドボール部で活躍されていたようで、体操の時間にハンドボールを教えていただいたのがハンドとの出会いでした。遠藤先生は何事にも熱心で、授業でも通常の内容をより理解させる為に、「教えて欲しい者は来い」という形で放課後に補習授業を行い、当時教室に電気の無かった時代に父兄からバッテリーを借りてきて、薄暗い光の中で解かるまで教えていただいたことが、とても印象に残っています。その後豊中第二中学校へ進むとき、先生も同中学に体育の先生として転任され、ハンドボール部顧問となり、私もハンドボールに打ちこみました。

そして名門、豊中高校に進まれました。

はい。高校では「少し勉強をしないと、いい大学には入れないぞ」と考えていたのですが、当時協会の副会長をされていた馬場太郎先生に､「ハンドボール部に入部しないのなら体育の点はやらない。したがって卒業は出来ないぞ。」と、冗談とも本気ともつかないことを言われ、結局入部しました。高校3年間は毎年インターハイ・国体に出場。2年次は国体で3位、3年次は共に優勝戦で敗れ、準優勝という成績でした。当時は大阪から東京へ行くのにも全て夜行列車で、それも3時間前には並ばないと座れない時代でした。それだけに生まれて初めての東京・福島・愛媛などへ行けることが、すごく嬉しいことでした。特に北海道国体に行くのに、京都から国体列車で40時間かけて行ったことが、今でも懐かしく印象に残っています。

そして、当時大学王座6連覇中の関西学院大へ。

現役、そして監督として活躍された渡辺一己氏がおられ、その練習の激しさといったら有名だったと思います。合宿中に警察へ逃げ込むものや、「オジキトク、スグカエレ」という電報を打たせて逃げ帰る者もいたようです。幸いにも私は1年次よりレギュラーとなりましたが、7連覇をかけた日体大との激戦、1点差で敗れ連覇を途切れさせるという苦い思いを味わいました。その後芝浦工大が強くなり、学生界では頂点を極めつづける時代が続き、2・3年次は同大学に敗れ万年2位の状態になってしまいました。しかし4年生のとき、初めて芝浦工大に勝ち全国制覇をすることが出来、そのときの感激は今も忘れることが出来ません。

確かに練習は厳しかったですが、練習後は同じ地区から通学しているものは1年から4年まで連れ立って帰り、遊ぶときも一緒。下級生が上級生に遠慮することは一切無く、お互いにコートを離れると良き友達といった非常にいいムードでした。この雰囲気を社会に出てからも自分の周りに作ろうと努力をしてきましたが、なかなか難しく未だ実現しておりません。

その後、湧永製薬の監督を務められましたね。

はい、ただいくらかのブランクがありましたので、技術的なことは選手に任せ、私は何とかチームの結束を高めよう、良い新人を獲得しようということに力を注ぎ、休むことなく練習に参加することを心がけました。仕事の時間に練習をするわけではなく、就業後にあれだけのハードメニューをこなしていたのですから、選手諸君は良く頑張ってくれたと今更ながら感謝をしております。チームが大阪から広島に移るまでの、約6年間の監督生活でしたが、その間全国レベルの大会で幾度となく優勝させていただき、またその当時の選手が後に全日本の監督、コーチ、選手として活躍してくれたことを、非常に喜ばしく思っております。

今の日本ハンドボール界に望むことは何でしょうか。

何としてでもオリンピックに出場し、勝負に執着しメダルを取って貰うことですね。熊本で、あのフランスにもう少しで勝つことが出来たのですから決して不可能ではないと思います。メダルを獲得することが、シドニーの例を見ても各マスコミに取り上げられ、普及には最善の道ではないでしょうか。

村中さん、どうもありがとうございました。
次号もお楽しみに。

子供の夢を大切に

企画・広報委員
早川　文司

2000年もサヨナラが間近に迫った昨年暮れのことだった。電話のベルが鳴ったと同時に、私の耳をつんざくと言ったら少々表現はオーバーだが、受話器の向こうからすごい言葉がいきなり飛び込んで来た。

「あまりにも情けない出来事があったんですよ。将来を背負う子供たちの夢を踏みにじる出来事が…」

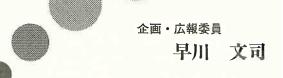
電話の声の主は単なるファンではない。ハンドボールの将来を楽しみにし、期待しながら、子供たちを指導している人である。言い換えれば“ハンドボール熱烈人間”である。そうした人（こういう人間がいることが絶対必要なことなのだが）を失望のどん底に落としたことは、あまりにも悲しいことであろうと素直に思う。

その悲しい出来事とは。電話の主の話から“再現”してみたい。

それは地方で行われた日本リーグの試合後だった。多くのハンドボールに親しんでいる子供たちが詰め掛けた会場だったという。素晴らしい戦いを見て、彼ら、あるいは彼女らはある程度の満足感に浸っていたらしい。

問題はそのあとに“起こった”のだった。戦いを終えて引き揚げる選手たちに子供たちは一生懸命にエールを贈った。ほとんどの選手は、その声援に手を振り、笑顔でこたえたようだ。

怒って電話をくれた人も「いい感じ。さすが日本のトップでプレーする人たちだ。こうした光景なら子供たちもいい印象を持つだろうし、ましてや、もっともっとハンドボールが好きになってくれるはずだ」と思ったという。

ところがである。その中のひとりの選手の行為が「素晴らしい雰囲気」をぶち壊したというのだ。心の底から試合を楽しみ、高度な技に感銘し、エールを贈っていたのだが、まったく見向きもせず、言い換えれば無視するような態度で引き揚げたという。

これには子供たちも「なんで…」と一気にしらけムードになってしまったらしい。せっかく彼らをハンドボールに向かせた指導者にとっては、まさに頭から水をぶっかけられたような、悲しい一瞬だった。

「日本リーグの選手たちは、子供たちにとってはあこがれ。自分たちも将来、そうした選手になりたい夢を持っている。でも、目の前に展開された“夢を砕く”行為によって、熱がさめていくのが恐い。トップクラスの選手は、絶対にすべてが彼らの“手本”になっているとの自覚を持ってほしい。本当にハンドボールを愛しているのなら、自分たちの一挙手一投足がどれだけ影響力があるのか知ってもらいたい」

私が共鳴したのは、その点である。代表だけでなく、日本リーグの選手は、将来につながる人間を育成する責務もあると思うからだ。ファンの声援には素直にこたえる義務もある。若い芽を枯らさないでもらいたい。

ANA

※貯めたマイルは、航空券に換えてからご利用ください。

ANA

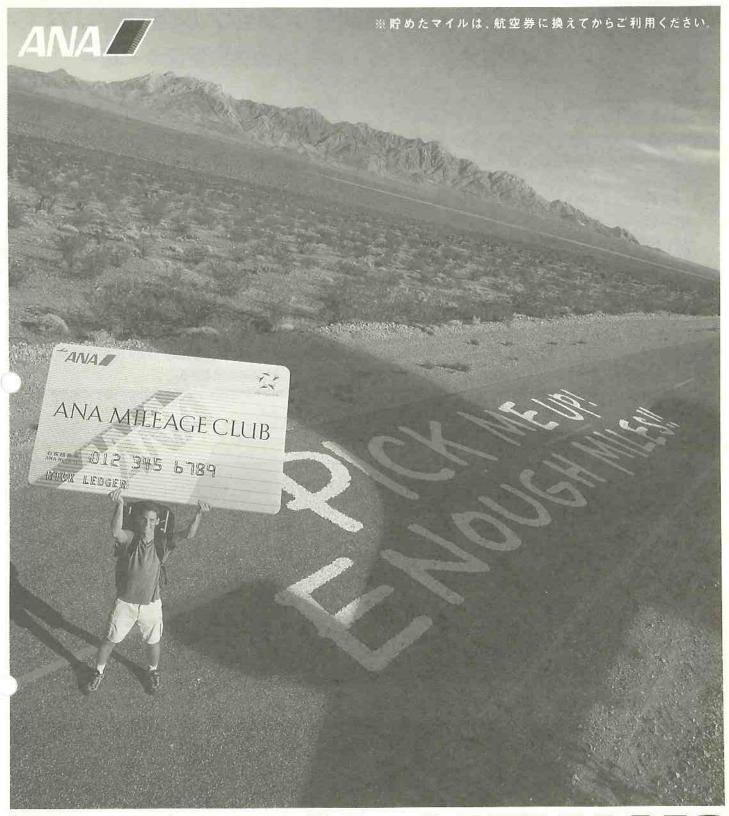
ANA MILEAGE CLUB

012 345 6789

NICK LEDGER

PICK ME UP! ENOUGH MILES!!

The MILEAGE of MILEAGES

ネットワークがひろがって、マイルがさらに貯めやすく、使いやすくなりました。

今、全日空の空が大きく広がろうとしています。充実した国内線はもちろん、国際的な航空会社ネットワーク「スターアライアンス」への加盟により、国際線もさらに拡大。マイレージも、ぐっとワイドに貯まります。選ぶなら、やっぱり「ANAマイレージクラブ」。貯めやすさが断然ちがいます。

*スターアライアンス加盟の提携エアライン

全日空（ANA）　エアーニッポン（ANK）　エアカナダ　ニュージーランド航空　アンセット オーストラリア航空　ルフトハンザ ドイツ航空　スカンジナビア航空　タイ国際航空　ユナイテッド航空　ヴァリグ ブラジル航空

*スターアライアンス以外の提携エアライン

オーストリア航空　ブリティッシュ ミッドランド航空　マレーシア航空　シンガポール航空　スイス航空

ANAマイレージクラブ

10月31日 全日空は、スターアライアンスに加盟。世界112ヶ国以上、760以上の都市をネットワークで結びます。

医科学委員会報告

ハンドボール競技男子ナショナル選手の体力

＝全日本、U－23・U－16の体力現況の一端＝

医科学委員長　西山逸成

平成12年度の研究事業として、全日本およびU－23の男子選手に対し、体力測定・メディカルチェック（ハンドボール機関誌№413、Nov2000）を実施し、現況把握するとともに、コンディショニングやトレーニング処方の資料を得ることができた。

全日本選手は2000年6月5日・6日に日本体育協会スポーツ科学研究所で実施したが、現況傾向として、体重は増加したが筋力系では全般に低下傾向がみられた。とくに基礎体力としての背筋力／体重（躯幹筋の指標）が3.0以上の選手が皆無であることや、握力／体重（屈指筋の総合指標）が0.8以上が僅か4名に過ぎない現況をみるときに、果たしてこの水準のチームをもってアジア引いては世界を目指していこうとするのかその姿勢に淋しさを感じたくなろう。筋力水準の低さはチーム競技力に影響を及ぼす以前に選手のスポーツ傷害を誘発させることに危惧を抱くべきであろう。

またU－23・U－16選手群は、2000年11月11日・13日・17日に日本体育大学健志台体育館、日本協会スポーツ科学研究所で実施したが、現況傾向としては、全身持久力指標としての最大酸素摂取量／体重の平均値50ml／kg／minで全日本チームよりも低値であり、筋力水準でも劣っている傾向がみられた。全日本チーム同様にスポーツ傷害として既に疾患区分としての観察・自己管理（B－1)、注意・指導者（B－2）そして精査（C－1）段階の選手すら実在することは、将来のナショナル選手の素材であることからみて、体力づくりの必要性の認識と実践として体力水準を前提とした選手選考が望まれる。

以上の所見は、今年度の測定のみではなく、1960年以降のハンドボール選手の体力測定結果から指摘されているところであるが、この問題点の解決は、個人意識と組織挙げての対策の両面から挑むべきであろう。

男子ナショナル選手の体力測定結果

1. 測定方法

対象は2000年度全日本男子ハンドボール選手21名で、測定は2000年6月5日～6日に、日本体育協会スポーツ医科学研究所および、大崎電気体育館にて実施された。対象となる全ての測定項目を実施したものは16名で、その他5名については、怪我、および日程の不都合により測定できなかった項目があった。形態測定、および測定方法は、日本体育協会スポーツ医科学研究所実施要項と同一の方法で行った。

2. 結果と考察

今回の測定結果は、表にして形態測定結果、体力測定結果、昨年度からの継続選手の体力数値の変化に分類して示した。

(1) 形態測定結果

身長は182.3±7.4cm、体重は、84.0±11.4kgで、昨年度の報告と比較して、身長では、2.4cm、体重では、2.5kgあまり減少していることがわかった。

(2) 体力測定結果および考察

筋力指標である、握力／体重ではハンドボール選手に必要とされる基準[1) 2)]である0.8を超える選手は、宮崎、辻、佐々木、角谷の4名だけであった。また、背筋力／体重では同様に3.0を超える選手は、皆無であった。これは、絶対値の大きな低下が要因となっているようである。特に、低値を示した永島、窪小谷、山口、佐々木においては、佐々木を除いた3名はともにポストプレーヤーであった。躯幹筋である背筋力は、相手との身体接触の最も多いポストプレーヤーにおいては必須な筋力要素であることからも、低値を示した選手たちの今後のレベルアップが期待される。上腕二頭筋の筋力レベルを測定した、屈腕力では、平均を大きく下回ったのは前田であった。前田については、背筋力の絶対値においても最低値を示していたことから、全体的な筋力トレーニング不足が感じられた。ハンドボール競技におけるパフォーマンスには、高い筋力が必要であり、まずは、バルクアップトレーニングで、筋量をふやすトレーニングを行うことが薦められる。

自転車エルゴメーターを用いて測定した最大無酸素パワーにおいては、角谷、田中、跳パワーを測定した、垂直跳びでは角谷、加藤、山口、永島らが低かった。角谷、加藤においては、昨年度の測定時においても低値群であったことからも、脚パワー系のトレーニングを増やしていくことが重要となる。

エアロビック能力を見た最大酸素摂取量では、体重あたり平均で53.6±4.8ml／kg／minで昨年度とほぼ同様の数値になったことから、現状を維持できていると考えられる。最大乳酸値、Lt speedをみると窪小谷、加藤、斉藤らに持久的能力の向上が望まれる。ハンドボールのゲーム中のハイパワーの能力を間欠的に行うインターバル的な運動形態を考えると、各個人においてもより高いレベルの有酸素性能力が必要となるであろう。

平成12年度　全日本男子ハンドボール選手の体力測定結果（形態）　I

氏名	身長(cm)	体重(kg)	体脂肪率(%)	皮脂厚(cm)			上肢長(cm)		前腕長(cm)		前腕長+指長(cm)		下肢長(cm)		下腿長+足高(cm)	
				上腕背部	肩甲骨下	腹部	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
前田誠一	182.8	79.5	13.2	・7	12	12.5	81.5	81.5	26.8	26.8	48.9	48.9	86.7	86.7	50	50.5
坪根敏宏	187.2	95.6		25.5	15.5	15.5	82.2	82.3	27.8	27.7	48.3	48	89	89	49.2	49.2
宮崎大輔	174	70.3	11.8	6.5	9.5	7	74.5	74.3	24	24	42.3	42.3	86.7	86.7	47.8	47
永島英明	188	88.9	16	12	13	17	84.1	84.1	27.6	27.6	48	48	95.7	95.7	51.8	51.8
木村祐介	185.9	84.1	13.9	7.5	13	20	82.7	82.7	28	28	48.6	48.6	86	86	48.2	48.2
下川真良	170	71	14.4	11	10.5	9	73.5	73.5	25	25	41.6	41.6	80.8	80.9	43.8	43.8
窪小谷貴浩	194.2	111	21.2	18	18	35.5	81.8	82	28.9	28.9	47.4	47.4	94.6	94.6	52.8	52.8
辻昇一	182.5	77	14.4	12	9.5	17	78	78.5	23.6	23.7	45.5	45.5	84.7	84.2	48.2	48.2
中川善雄	178.7	77.9	13	9	9.5	12	81.5	81.5	26.7	26.6	45	45.7	87.3	87.4	46.5	46.8
山口修	190.1	98.4	18.1	18	11.5	30.5	87.5	87.2	29.2	29.2	50.4	50.2	93.5	93.5	51.5	51.5
佐々木教裕	191.1	97	19.6	16	16.5	10.5	87.2	87	28.4	28.4	49.1	48.7	91	91	50.5	50.5
田中将	172.5	77	15.5	11.5	12.5	16	74.8	74.8	25.8	25.8	45.2	45.3	80.1	80.1	44.8	44.8
広政宣孝	177.4	75.6	13.4	9	10.5	14	77.5	77.5	24.7	24.7	44.8	44.8	90.4	90	47.5	47.5
角谷祐司	174.3	75.2	12.3	6	11	5.5	77.2	77.2	25.2	25.2	42	42	83.3	83.3	45.2	45.2
池辺健二	192.2	97	19.1	16	15.5	26	85	85	29.1	29.1	47	46.8	94.5	94.5	51.5	51.5
加藤圭介	176.2	77.8	13.7	9	11	14	74.5	74.5	26.2	26.2	42.5	42.5	85.2	85.2	45.2	45.4
斎藤泰貴	186	83.2	13.9	7	13.5	9.5	82	82	27.4	27.4	48.2	48.2	90.8	90.8	50	50
阿部展行	178.6	75	10.7	5.5	8	6	77.1	77.1	27.1	27.1	43	43	86.2	86.2	47.7	47.7
AVG	182.3	84.0	15.0	11.5	12.3	15.4	80.1	80.2	26.8	26.7	46.0	46.0	88.1	88.1	48.5	48.5
SD	7.39	11.41	2.94	5.36	2.72	8.23	4.40	4.37	1.73	1.72	2.82	2.75	4.83	4.63	2.66	2.67
MAX	194.2	111.0	21.2	25.5	18.0	35.5	87.5	87.2	29.2	29.2	50.4	50.2	95.7	95.7	52.8	52.8
MIN	170.0	70.3	10.7	5.5	8.0	5.5	73.5	73.5	23.6	23.7	41.6	41.6	80.1	80.1	43.8	43.8

平成12年度　全日本男子ハンドボール選手の体力測定結果（形態）　II

	足高(cm)		上腕伸展囲(cm)		上腕屈曲囲(cm)		前腕囲(cm)		大腿囲(cm)		下腿囲(cm)		胸囲(cm)	指極(cm)
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左		
前田誠一	5	5	26	27.2	30	30.4	25.6	27.8	56.6	56.8	39.6	40.2	99.9	192
坪根敏宏	5.7	5.7	33.2	31.7	35.2	34.3	29.7	29.2	64.3	64.6	41.5	41.7	105.7	191.5
宮崎大輔	6	6	30.1	28	32.6	31.6	29.3	25.6	55.1	53.2	40.1	38.3	91.4	175.5
永島英明	6	6	30.2	30.6	33.2	32.7	28.3	27	63.5	63.3	41.9	41.1	103.2	194
木村祐介	5.5	5.5	30.9	29.8	33	32.4	28.3	26.9	60.5	60.9	42.2	41.6	100.4	191
下川真良	5.5	5.5	30	30.8	32.4	31.5	28.9	28.1	58.3	58.8	41	41	95.9	170
窪小谷貴浩	6.7	6.7	34.4	32.7	35.8	35.6	30.6	29.5	68.4	68.1	43.5	42.2	112.2	192.5
辻昇一	5.5	5.5	31.3	29.9	33	32	26.7	26.6	57.3	57.7	39.2	39.5	96.5	184
中川善雄	5.2	5.2	29.5	28.9	31.3	31	27.6	27.3	59	58.6	38.8	39.3	97	186
山口修	6	6	32.8	33.1	36	36.3	30.1	29.3	64.4	63.5	40.7	40	105.3	202.5
佐々木教裕	6.5	6.5	33	32	37	36	32	29	62	62.5	42	41	105	199
田中将	5.3	5.3	29	30.1	29.8	31.4	26.4	28.2	58.9	59.6	41.2	40.2	96.2	175
広政宣孝	6	6	31.4	32.6	29.3	30.5	26.3	26.8	56.3	56.5	38.2	39.5	94.2	182
角谷祐司	5.5	5.5	30.9	30.8	33.5	33.8	29.2	30.1	56.8	57	41	40	99.5	183
池辺健二	6	6	31.4	31.4	35.8	35.1	28.2	27.3	63.7	62	39.7	40.5	112	199
加藤圭介	5.7	5.7	31.5	30.1	35.6	34.3	30.4	29	60.3	60.4	27.6	38.5	97.9	176
斎藤泰貴	6	6	31	30.8	32.9	33	28.8	27.6	59.3	59.3	39.7	40.3	100.6	191.5
阿部展行	5	5	28.2	28.9	31	31.1	25.9	26.9	57.5	56.3	40.9	39.8	94.6	181.5
AVG	5.7	5.7	30.8	30.5	33.2	32.9	28.5	27.9	60.1	60.0	39.9	40.3	100.4	187.0
SD	0.47	0.47	1.96	1.61	2.33	1.94	1.79	1.22	3.57	3.61	3.35	1.05	5.84	9.26
MAX	6.7	6.7	34.4	33.1	37.0	36.3	32.0	30.1	68.4	68.1	43.5	42.2	112.2	202.5
MIN	5.0	5.0	26.0	27.2	29.3	30.4	25.6	25.6	55.1	53.2	27.6	38.3	91.4	170.0

敏捷性と走パワーを含めた30mダッシュ、20－40－20mでは、宮崎、阿部、田中らが優れ、池辺、山口、窪小谷らが劣る傾向にあった。この結果から、サイド陣は、敏捷性に優れていることが明らかで、ポスト陣においては更なる敏捷性を高める必要があるといえる。

投パワーであるボールスピード（初速）では、野村、中山、斉藤、中川らが、100km／hを超えるボールスピードを示していた。

また、昨年度からの継続されている代表選手の数値に注目すると、体重においては、1.3kgほど増加傾向が見られるが、筋力系においては、ほとんど低下している傾向にあった。唯一、自転車エルゴメーターによる無酸素パワーに関しては、昨年の数値を上回っていた。このことから、ベテランの選手の年齢が上がってきていることも含めて、体力レベルの維持にとどまっている感じがうかがえ

平成12年度　全日本男子ハンドボール選手の体力測定結果（機能）Ⅰ

氏名	握力(kg)		握力/体重		背筋力(kg)	背筋力/体重	屈腕力(kg)		無酸素パワー	垂直飛び	立位体前屈	全身反応時間	最高心拍数	最大換気量
	右	左	右	左			右	左	(watt)	(cm)	(cm)	(msec)	(beats/min)	(l/min)
前田誠一	46	55.5	0.58	0.70	160	2.01	22	23.5	1073	47	6.6	299.5	192	165.1
坪根敏宏	56	58	0.59	0.61										
宮崎大輔	61	60	0.87	0.85	184	2.62	26	24	1057	57.5	1.7	261	187	151.9
永島英明	69	52	0.78	0.58	161	1.81	30	31	1124	44.3	4.1	294.9	189	152.7
木村祐介	56.5	51.5	0.67	0.61			26	27	1221	51.2		256.2	205	149.8
下川真良	52.5	55	0.74	0.77	181	2.55	27	25.5	1124	52	7	284.1	174	115.1
窪小谷貴浩	61.5	67.5	0.55	0.61	171	1.54	30	30	1356	38.5	0.4	328.9	192	169.6
辻昇一	62.5	55.5	0.81	0.72	188	2.44	31	30	1170	47.4	15.4	293.8	192	165.4
中川善雄	61	53.5	0.78	0.69	193	2.48	31	31	1145	53.1	18.5	280.6	187	157.9
山口修	72	61	0.73	0.62	177	1.80	29	27	1128	41.4	2.9	317.6	170	167.2
佐々木毅裕	86	58.5	0.89	0.60	192	1.98	31	28	1512	48.4	9.5	302.5	187	145.6
田中将	54	59.5	0.70	0.77	188	2.44	26	26.5	997	51.3	17.5	313.3	192	139.1
広政宣孝	52	53.5	0.69	0.71	175	2.31	27.5	30	1018	52	8.9	304.7	178	168.2
角谷祐司	58.5	68	0.78	0.90	177	2.35	31	32.5	1006	44	19	263.5	185	167.9
池辺健二							32	33	1191	37.9	11.2	312.9	178	203.4
加藤圭介	52.5	42.5	0.67	0.55	181	2.33	32	31.5	1047	45.9	5.4	308	197	57
斎藤泰貴	60	57	0.72	0.69	165	2.22	33.5	34.5	1219	52.3	13.2	273.3	180	153
阿部展行	51.5	57	0.69	0.76	184	2.45	25	25	1155	57.2	11.4	262.1	205	176.3
日原一幸														
中山剛														
野村広明														
AVG	59.6	56.8	0.68	0.65	179.8	1.96	28.8	28.8	1149.6	48.3	9.5	291.6	187.6	153.2
SD	9.42	5.93	0.19	0.19	9.94	0.80	3.10	3.30	130.86	5.82	5.99	22.35	9.74	30.87
MAX	86.0	68.0	0.89	0.90	193.0	2.62	33.5	34.5	1512.0	57.5	19.0	328.9	205.0	203.4
MIN	46.0	42.5	0.55	0.55	160.0	1.54	22.0	23.5	997.0	37.9	0.4	256.2	170.0	57.0

平成12年度　全日本男子ハンドボール選手の体力測定結果（機能）Ⅱ

氏名	最大呼吸数	VO2max	VO2max/W	最大乳酸値	LT speed	4mmol speed	30Mダッシュ	20:40:20	アジリティー	5ステップ	垂直とび	ball speed(km/sec)	
	(b/min)	(ml/min)	(ml/kg/min)	(mmol)	(m/min)	(m/min)	(sec)	(sec)	(sec)	(m)	(cm)	step	junp
前田誠一	54	4652.2	58.7	9.9	203.5	245	3.9	12.84	7.9	14.1	60	97	97
坪根敏宏													
宮崎大輔	58	4085.1	58.1	12.9	189.4	23.7	3.86	12.49	8	14.2	73	94	88
永島英明	46	4361.3	48.7	10.2	175.3	214.6	4.06	13.28	7.97	13.8	61	94	83
木村祐介	70	4405.8	52.5	11.1	199	233.9	3.98	12.68	8.1	14.4	62	82	86
下川真良	40	3760.9	53	9.8	196	222.2	3.89	12.67	8.18	13.7	72	92	81
窪小谷貴浩	55	4925.8	44	8.1	174.6	192.9	4.04	13.98	8.51	10.4	48	88	72
辻昇一	59	4479.1	58.2	13.7	223.9	256.5	4.06	12.71	7.61	13.6	58	93	91
中川善雄	61	4239.3	54.4	14	191.4	190.4	3.97	12.55	8.26	14.1	70	100	96
山口修	56	4680.9	47.6	9.6	201.3	237.8	4.44	13.84	8.52	12.5	52	92	82
佐々木毅裕	45	4825.8	49.8	10.7	194.3	230.3	4.05	12.96	8.29	13.5	62	99	98
田中将	60	4125.2	53.2	11.8	187.7	228.7	3.92	12.54	7.88	13.6	68	89	87
広政宣孝	76	4157.2	55	12.1	210.3	251.1	4.06	12.81	8	14.1	71	87	86
角谷祐司	60	4206.7	55.9	10.5	191.8	226.4	3.97	13.2	8.24	13.4	62	93	91
池辺健二	62	5199.2	53.6	9.1	200.7	253.2	4.42	13.95	8.22	12.6	52	92	93
加藤圭介	145	4051.1	52.1	8.8	212	252.1	4.1	12.91	7.52	13.5	64	93	83
斎藤泰貴	49	4338.1	52.1	7.8	168.8	227.1	3.93	12.64	8.14	14.2	66	101	89
阿部展行	54	4840.5	64.5	11	209	233.2	3.86	12.16	8.16	15.2	79	86	82
日原一幸												88	81
中山剛												102	96
野村広明												103	93
AVG	61.8	4431.4	53.6	10.7	195.8	218.8	4.03	12.95	8.09	13.6	63.5	92.5	87.4
SD	23.17	375.41	4.79	1.81	14.37	53.72	0.17	0.53	0.27	1.04	8.25	5.72	6.73
MAX	145.0	5199.2	64.5	14.0	223.9	256.5	4.44	13.98	8.52	15.2	79.0	103.0	98.0
MIN	40.0	3760.9	44.0	7.8	168.8	23.7	3.86	12.16	7.52	10.4	48.0	82.0	72.0

る。現在の体力を更に向上させていくためには、より綿密なトレーニングメニューを立てて、継続的に行っていくことが重要となってくるであろう。

今回の体力測定結果から、上肢、体幹部の筋力の低下が目立った。ハンドボール競技が、年々コンタクトプレーが激しくなる傾向にある現在、更なる、体幹、下肢筋量の増加が求められてくるであろう。選手の傷害の防止はもちろん、増加した筋量を効率的にパフォーマンスに反映する調整力等、更なるトレーニングが望まれる。

（斉藤慎太郎、竹之谷文子、竹内正雄、高橋勝美、森田俊介、田中守、田村耕一郎、市村志郎、松井幸嗣、西山逸成）

［参考文献］

1) 男・女ナショナル選手の体力測定結果

から見た運動処方の方向、平成11年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告、No.Ⅱ　競技種目別競技力向上に関する研究、第23報、ハンドボール、18－22、1999
2）男子ナショナル選手の体力と皮下脂肪厚および筋肉厚分布、平成10年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告、No.Ⅱ　競技種目別競技力向上に関する研究、第22報、ハンドボール、273－275、1988

全日本継続選手の体力の比較
n = 10

	1999	2000
身長(cm)	182.3±5.62	182.3±7.39
体重(kg)	82.6±8.73	83.9±11.41
握力(kg)	62.7±7.99	59.6±9.42
握力/体重	0.7±0.25	0.68±0.19
背筋力(kg)	202±23.48	179.8±9.94
背筋力/体重	2.25±0.82	1.96±0.80
無酸素パワー(watt)	1114.7±132.64	1149.5±130.86
垂直飛び(cm)	50.4±4.84	48.3±5.82
立位体前屈(cm)	14.0±5.26	9.5±5.99
全身反応時間(msec)	285.7±24.80	291.6±22.35
最大酸素摂取量(l)	4650±329.39	4462.2±378.70
最大酸素摂取量/体重(ml/kg	56.6±4.98	54.6±4.71

U－23男子全日本代表選手の体力測定結果

《方法》

1. 体力測定方法

対象は2000年度U－23、U－19全日本男子ハンドボール選手16名（20±0.85歳）であった。測定は日本体育大学健志台体育館および、日本体育協会スポーツ医科学研究所で実施された。測定項目は形態測定として身長、指極、上肢長、手長、下肢長、足高、胸囲、上腕囲（屈曲、伸展）、前腕囲、大腿囲、下腿囲、体重、皮脂厚を測定し、体力測定としてトレッドミルオールアウト走を用いての最大酸素摂取量、最高心拍数、最大呼吸数、最大喚起量、最大乳酸値測定、および握力、背筋力、垂直跳び、全身反応時間、サイドステップ、30m走、20－40－20m走、50mドリブル走、長座位ハンドボール投げ、立位体前屈をおこなった。測定方法は99年全日本男子体力測定の際に行った方法を用いた。

2. 分析方法

まず、各測定項目結果について平均値、標準偏差を算出した。握力、背筋力に関しては体重比を算出し比較に用いた。また、20－40－20m×10本の測定結果に関しては10本の走タイムのうち、最高タイムと最低タイムをとりあげ、タイムの落ち具合を低下率として定義し、最低タイム／最高タイム×100（%）として算出された。

以上のように算出されたデータに関して以下のとおりにまとめることにした。

①それぞれの平均値と99年全日本男子体力測定結果から算出された平均値を比べ現U－23代表選手の能力を検討した。

②また、今回の測定項目のなかで垂直跳び、30m走、20－40－20m走、50mドリブル走、サイドステップの項目に関しては対照群として日体大ハンドボール部員15名の測定を行っており、対照群の測定結果と比較して現U－23代表選手の能力を検討した。

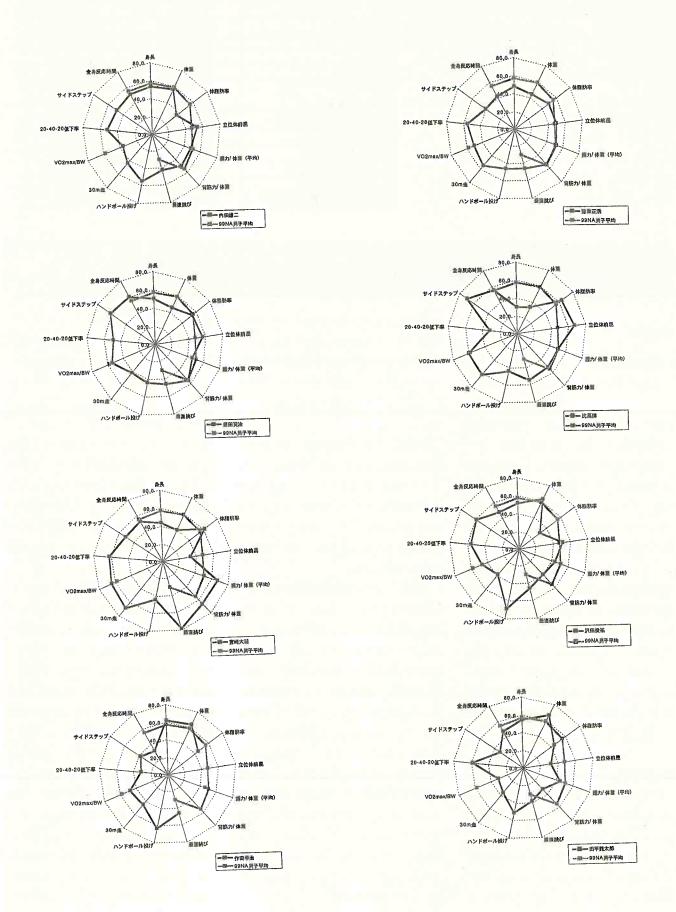
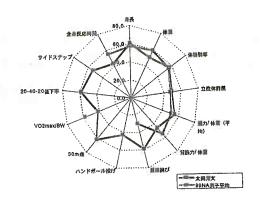
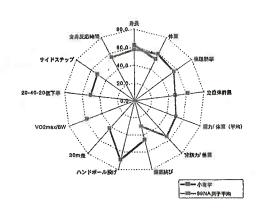
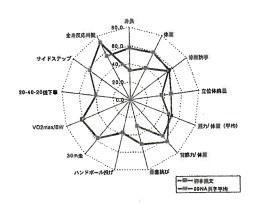
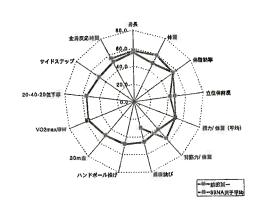
③現U－23代表選手の測定結果の平均値を50とみなし、各U－23代表選手の能力を偏差値として算出し、各個人ごとにグラフ化した。グラフ化については体組成の要素として身長、体重、体脂肪を、柔軟性の要素として立位体前屈を、筋力的要素として握力、背筋力の体重比を、パワー的要素として垂直跳び、ハンドボール投げを、スピード要素として30m走を、全身持久的要素として最大酸素摂取量の体重比（VO2max／BW）、20－40－20m走の低下率を、敏捷性要素としてサイドステップ、全身反応時間を項目として選択した。グラフにより各個人の体力要素の分布を示し、各個人の特徴、今後の課題を考察した。

《結果》

1. U－23選手測定結果の検討（99NA男子との比較を含めて）

体組成（身長、体重、体脂肪）、形態（上肢長、下肢長など）は、皮脂厚以外の全ての項目で、99NA男子のデータに比べて劣っている。つまり現U－23代表選手は、体格の観点からいうとまだNA男子のレベルには達していないことが伺える。現U－23代表選手のうち、低身長である比嘉、柳本選手のデータを抜いて比較をしても、99NA男子に比べ身長で－2.5cm、体重で－6kgと全体的に体格（特に体重）の面でサイズアップが必要と考えられる。

筋力的要素（握力、背筋力）（表2）はほとんど全ての項目でNA男子に比べて劣る結果であった。ハンドボール選手として必要な握力の体重比（握力／体重＝0.8）、背筋力の体重比（背筋力／体重＝3.0）＝医科学委員会基準＝に対し、今回それをクリアした選手は、握力では宮崎、柳本のわずかに2名であり、背筋力においては同様の宮崎、柳本が高値を示してはいるが、3.0には及ばなかった。

今回の測定の中では、垂直跳び、立位体前屈の2つの項目においてのみ、U－23の結果が99NA男子の平均を上回った。垂直跳びにおいても背筋力で高値を示した宮崎、柳本が高かった。垂直跳びは脚パワーの指標ではあるが、体幹筋力をも良く反映していることが伺える。とすると、体幹筋力が小さいにもかかわらず、高く跳べるU－23に比べ、体幹筋力

が大きいにもかかわらず高く跳べないNA男子では、うまく筋力を使えてない状態であることが推測される。U－23に関しては体幹筋力を鍛えることでより高く跳べると考えられ、NA男子では持つ筋力を素早く発揮できるように、ハイクリーンやスクワットジャンプなどのパワー発揮型のウェイトトレーニング、ジャンプトレーニングが有効ではないかと

考えられる。

立位体前屈は柔軟性の指標であり、現U－23は99NA男子チームに比べ柔軟性は高かった。柔軟性は障害予防の観点から見ても高水準が必要である。現U－23のうち宮崎、柳本は筋力が高い割に柔軟性が著しく低く、逆に小倉、比嘉は柔軟性が高い傾向がみられた。筋力と柔軟性のバランスの維持は筋・関節の障害予防の見地からも継続的な筋力強化、柔軟性の維持が必要であろう。

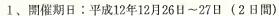
全身持久力の指標である体重当たりの最大酸素摂取量（ml／kg／min）も99NA男子の平均には届かなかった。ハンドボールは60分間のゲーム中に約60本の攻撃、約60本の防御を行う、いわゆる間欠的なパワー型の競技といえるが、攻防のなかの僅かな休息時間でどれだけ体力を回復することができるかは全身持久力の能力水準が鍵であると考えられている。つまり、60分間最後まで走りきり、守りきるためには全身持久力の能力が高い必要がある。今回のU－23ではNAレベルには到達しなかったものの、宮崎、柳本、比嘉といったスピード能力が高い選手は最大酸素摂取量も高かった。これらの選手はスピードも高く回復も早く典型的な速攻型の能力であると言える。逆に内田、田平などの選手は99NA男子レベルを大きく下回り、スタミナには不安を抱えていると言えよう。今回のU－23の測定結果ではサイドの選手は最大酸素摂取量が高く、フローターポジションの選手は最大酸素摂取量が低い傾向を示していた。これらはポジション特性と言えるのか、また偶然そうなったのかは明確ではないが、興味深い傾向であった。

以上のことから現U－23代表選手の特徴は、体格、筋力など全体的な能力に劣るものの、スピード系、持久系の能力で勝負する速攻型のチームカラーと伺える。現U－23代表選手が今後NA選手へ成長していくためには、体格（体重）を大きくし、体重増加に負けない筋力をつけ、さらに有酸素能力を高くすることが必要であろう。現U－23代表選手は垂直跳びの脚パワーが高いという良い傾向があるため、体重が増加することによってその能力が低くならないように、体幹、下肢のバルクアップに加え、パワーアップを目指したハイクリーンやスクワットジャンプなどのパワー発揮型のウェイトトレーニング、継続的なジャンプトレーニング、さらには全身の協調性トレーニングが必要であると考えられる。また体重増加は障害を誘発する危険性を伴うため、体重の増加に関連して体脂肪の増加に注意を払い、体脂肪の増加を抑える目的としての有酸素運動も取り入れることを推奨したい。

［市村志郎（東京医大）、松井幸嗣・斉藤慎太郎（日体大）、田村耕一郎（筑波大）、西山哲成（愛知医大）、竹内正雄・竹ノ谷文子（星薬大）、江明冷（早大）、坂本静男（順天堂浦安病院）、千葉裕典・西山逸成（順天堂大・公衛）、松　喜美雄（函館大）、田村修治（東海大）］

連載9

ナショナルトレーニングシステム(NTS)センタートレーニング 小学生の部(U-12)報告

NTS運営委員長 蒲生晴明

1、開催期日：平成12年12月26日～27日（2日間）
2、開催場所：大阪府堺市・上宮高校体育館・家原大池体育館（ＪＯＣジュニアオリンピックカップ）
3、対象者：ＮＴＳブロック推薦優秀選手とその指導者
4、実践報告

(1)はじめに

2000年からスタートしたＮＴＳでは、全国９ブロックから選抜された優秀な選手とその指導者を一堂に集め、若年層段階からの一貫指導・指導統一を目的に標記センタートレーニングを実施した。

日本ハンドボール協会としては、小学生の優秀選手を全国から選抜したのは初めてのことである。

(2)トレーニングの内容などについて

今回のトレーニングでは、次の３点について重点的に指導した。

指導のポイント（重点指導項目）
・コーディネーショントレーニング実施
・ＭＡＮ─ＭＡＮ（フェイントのバリエーション：５パターン）テクニック習得
・常にゴールを狙う

当然のことかもしれないが、８～14歳という神経系の発育発達が著しいこの時期にはテクニックの面とタクティクス面の両面から子供達に良い刺激を与える必要がある。そういった意味で、今回のこの３点について、短い時間ではあったけれども、上達のきっかけとなったことと思う。

特に、コーディネーショントレーニングについては、NTS強化指導教本を中心に様々なバリエーションで子供達に色々な動きを自然にさせることができたと考えられる。指導者の方々には、このトレーニングを更に拡大しながら、日々の練習のヒントとしてアイデアを凝らして頂ければ幸いである。

ＭＡＮ─ＭＡＮのフェイントトレーニングについては、世界でプレーされているフェイントを５パターン紹介しながら、子供達にプレーして頂いた。終了後のアンケートにも、子供達から「色々なフェイントを習ったことが良かった」と多く述べられている。

ミニゲームでは、「常にゴールを狙う」ことを強調しながらプレーをさせたが、そのポイントを忠実に実行していた。さらに将来性のあるプレーが随所にアピールできていた。

(3)ＶＴＲ指導、栄養と水分補給などミーティング

夕食後、栄養と水分補給について、大塚製薬からプレゼンテーションを行った。

ＶＴＲ指導では、シドニーオリンピックのスペシャルシーンを編集したものを見せ、解説を行った。

この時期は非常に感受性が強いことから、トレーニングばかりでなく良いプレーを見せることも重要であり、かなりのインパクトがあった様である。また、トレーニングでの５パターンのフェイントやＧＫセーブの場面では、世界での実際のシーンがそのまま映像で確認できたことも大変に良い刺激となっていた。

また、同席して頂いた指導者の皆さんとも、ディスカッションを通して相互に理解を深めることができた。

(4)おわりに

今回のセンタートレーニング開催にあたり、大阪ハンドボール協会の奥浜副会長、中村理事長には、大変にお世話になり心から御礼申し上げます。また、ＪＯＣジュニアオリンピック見学では、大会関係の皆様のご配慮で、子供達に特別席を用意して頂き、誠にありがとうございました。

目の前で中学生のプレーを見て、「次は自分達の出番！」と高いモチベーションを抱いたことと思います。

ＮＴＳを推進していく中では様々な課題・改善点がある

と思います。進める中で、子供達により良い環境を与えながら、一つ一つ課題をクリアーして日本ハンドボールが世界の常連国の仲間入りができるようシステムを充実していきたいと考えております。

小学生スケジュール

	小　学　生	指　導　者
14:00 15:00 18:00	受付後、上宮高校へ移動 ウォーミングアップ コーディネーション・ボディーコントロール man-manフェイントトレーニング GKトレーニング・ミニゲーム ホテルへ移動	受付後、上宮高校へ移動 トレーニング見学 指導方法の把握 指導ポイントの検討 トレーニングのヒント抽出 ホテルへ移動
20:00	入浴・夕食	入浴・夕食
  22:00	ＶＴＲによる指導(シドニーオリンピックスペシャルシーン編集) 栄養・水分補給など 就寝	ＶＴＲによる指導(シドニーオリンピックスペシャルシーン編集) 戦術・技術などディスカッション 栄養・水分補給など 就寝
7:00 7:30 9:00 10:00 14:00	起床 朝食・事務手続き 家原体育館へ移動(荷物を持って行く) JOCジュニアオリンピックカップ見学 アンケート提出後、解散	起床 朝食・事務手続き 家原体育館へ移動(荷物を持って行く) JOCジュニアオリンピックカップ見学 アンケート提出後、解散

NTSセンタートレーニングブロック推薦優秀選手・指導者

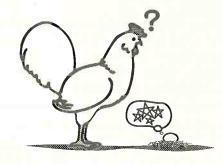
小学生男子：U-12

県　名	氏　　名	所　　属
北海道	松山浩基	高盛小学校
〃	田上将司	〃
茨　城	渡海　慎	守谷クラブ
〃	中井川諒	学園クラブ
〃	横田光明	〃
〃	小室大地	麻生Jr
千　葉	足立雅央	小林クラブ
福　井	上田慎也	安居小学校
富　山	中田祐樹	宮田小学校
兵　庫	西脇和宏	播磨ラッキーズ
奈　良	西埜浩史	安堵小学校
岡　山	石田恵奨	下津井クラブ
広　島	森政佑充	甲田ハンドボール部
山　口	萬水寛貴	リトルガッツ
大　分	佐藤崇吉	明野西小学校
〃	久保侑生	明野北小学校
宮　崎	早瀬光昭	延岡東小学校
〃	山下和樹	小林三松小学校
沖　縄	比嘉竜太	当山小学校
〃	砂川慶哉	神森小学校

小学生女子：U-12

県　名	氏　　名	所　　属
茨　城	青葉沙也加	学園クラブ
〃	向井由貴奈	〃
〃	武田祥佳	〃
千　葉	船橋有里	日吉台クラブ
富　山	竹内美沙紀	上庄小学校
〃	雨池裕希	仏生寺小学校
〃	新井貴子	〃
大　阪	中西　望	貝塚バーディーズ
広　島	徳山あさみ	甲田ハンドボール部
山　口	山上麻美	リトルガッツ
〃	古田あづさ	〃
熊　本	中池　翠	網津小学校
大　分	山住静香	高田小学校
沖　縄	平安山静華	当山小学校
〃	渡久山千裕	〃
〃	山城里乃	沢岻小学校

小学生男女指導者

県　名	氏　　名	所　　属
北海道	高田智史	高盛小学校
茨　城	中山　悟	守谷クラブ
〃	小室大地	麻生Jr
千　葉	加藤益弘	小林クラブ
〃	高橋　鉄	日吉台クラブ
福　井	松山定裕	安居小学校
富　山	金田尚久	宮田小学校
〃	竹内貞明	上庄小学校
〃	林　外美	仏生寺小学校
大　阪	掘　廣道	大浜キッズ
〃	木田武夫	貝塚バーディーズ
兵　庫	都倉功充	播磨ラッキーズ
奈　良	森　　寛	安堵小学校
広　島	宮本智雄	甲田ハンドボール部
山　口	飯田圭子	リトルガッツ
沖　縄	高良政幸	当山小学校

NTSセンタートレーニング小学生プログラム

指導のポイント（重点指導項目）	・コーディネーショントレーニング実施 ・MAN-MAN（フェイントのバリエーション）テクニック習得 ・常にゴールを狙う

カテゴリー	トレーニング内容	用具等	小学生
ウォーミングアップ１	ドリブルウォーミングアップ	１人にボール１個	○
	２人でウォーミングアップ		○
	まねっこ・膝タッチ・腰タッチ		○
	ボール取りっこ		○
コーディネーション１（ワンマントレーニング）	くるくるキャッチ・おんぶキャッチ	１人にボール２個	○
	２ボール同時ドリブル・交互ドリブル		○
	ドリブル＆キックドリブル		○
	２ボールジャグリング		○
コーディネーション２（ツーマントレーニング）	２ボール→３ボールパス	１人にボール２個	○
	トス＆パス・キック＆パス		○
	ドリブル＆パス		○
	片手キャッチ（ボール１～２）		○
コーディネーション３	３対２のパスゲーム	カラーベスト	○
ボディーコントロール（ディフェンス）	ディフェンスフォーム		○
	キャッチ＆ウォーク		○
パスコントロール１	基本フォーム（スロー・キャッチ）	コーン	○
パスコントロール２	パス（パラレル・クロス）		○
パスコントロール３	６人パス（ボール１～３）		○
シュートコントロール１	ノーマークシュート	コーン	○
シュートコントロール２	ステップ＆ジャンプシュート＋ディフェンス		○
MAN-MAN１	シュート・ステップフェイント	コーン	○
	スイング・ローリング・ジャンプフェイント		○
MAN-MAN２	フリーで１対１のゲーム	カラーベスト	○
グループ戦術１（２対２のオフェンス）	２対２パラレル・クロス・ブロック	コーン カラーベスト	○
グループ戦術２（３対３のオフェンス）	３対３パラレル・クロス・ブロック		○
	３対３スクリーン＆ポスト		○
ゴールキーパー１	コーディネーション		○
ゴールキーパー２	基本フォーム＆＋ボール反応		○
	基本フォーム（ロー／ハイコーナー）		○
ゴールキーパー３	ロー・ハイコーナーセーブ		○
	ノーマークシュートセーブ（同方向・逆方向）		○
	ロング・ポストシュートセーブ		○
ゴールキーパー４	パスアウト		○
ミニゲーム		カラーベスト	○

「実施上の留意点」

1．基本的には、ＶＴＲ・指導教本を中心に実施する。
2．プログラムは上表を主体に行う。（できるまでするのではなく、上達のきっかけにさせる。）
3．説明は、簡潔に短くプレーを多くさせること。
4．体力測定は、実施しない。
5．休憩・水分補給をこまめに実施すること。

平成11年度から
新会員登録制度
スタート！

がんばれ ハンドボール 10万人会

● HANDBALL　FAMILY

	年会費	主な特典
グランド会員	10.000円	日本協会機関誌（年11回） 日本協会主催大会無料パス 会員バッジ 日本協会認定グッズの割引
ファミリー会員	3.000円	日本協会主催大会無料 ペア券1枚 会員バッジ 日本協会認定グッズの割引

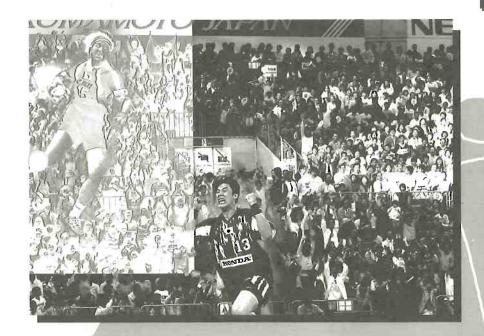
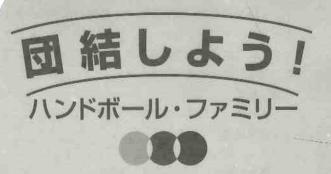
■登録増によるメリット

- メジャースポーツとして認知
- 登録金の増収

- スポンサーがつく
- 全員参加意識の高揚

財源確保

各種事業への活用と充実

- ○小・中学校の普及
- ○ビーチ・マスターズ・車いすハンドの支援
- ○ミニハンドボール競技の導入
- ○ジュニア層の重点強化
- ○各大会の補助金アップ
- ○国際大会の招致
- ○一貫指導体制の確立

少子化の影響などにより登録人口の減少傾向が各スポーツ界の大きな悩みになっています。昨今の経済不況も深刻さを増すばかりです。

今こそハンドボール・ファミリーが団結する時です。皆さんが自分のチームを愛するように、日本ハンドボールを愛して下さい。登録人口が増え、財源が大きくなれば、小・中学校の普及はもとより、ビーチ・マスターズ・車椅子ハンドボールの支援、ミニハンドボールの普及、また強化の根幹となるジュニア層の重点強化、そして各大会の補助金アップや国際大会の招致などにつながります。

皆さん1人ひとりが主役です。選手、審判、役員、OB、OGなどに限らず新たなサポーターも募り、全員参加のもとでメジャー化を図り、ハンドボール文化を構築しましょう。

グランド会員、ファミリー会員への入会方法

所定の申し込み用紙に必要事項をご記入の上、お申し込み下さい（郵送の場合は切手は必要ありません）。後日、日本ハンドボール協会から会員バッジなどをお送りします。年会費はご指定を受けた金融機関の口座から引き落としさせていただきます（ほとんどすべての金融機関でご利用できます）。

なお、申し込み用紙は、日本協会、各都道府県協会、または各全国連盟事務局にご請求下さい。

財団法人　日本ハンドボール協会

〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1　岸記念体育館内
TEL.03-3481-2361　FAX.03-3481-2367
http://www.handball.or.jp/

〈IHF／AHF新役員決まる〉

ＩＨＦ・ＡＨＦ総会が、11月26日から30日までポルトガルのエストリエルで開催され、新しいＩＨＦ、ＡＨＦ役員が選出された。

ＩＨＦ会長はエルビン・ランツ氏が勇退し、エジプトのハッサン・ムスタファ氏が新会長に選出された。また、日本からは渡邊日本協会副会長がアジア代表理事に選出されている。

ＡＨＦ会長は、クウェートのシェイク・アーメッド氏が再選されている。日本からは、ＡＨＦ副会長に、渡邊日本協会副会長が新たに選出された。

ＩＨＦ・ＡＨＦの新役員は表１の通りとなった。

表１　ＩＨＦ

会　長	Dr．ハッサン・ムスタファ（EGY）
第１副会長	スタファン・ホルムクイスト（SWE）
副会長・アフリカ	クリストフ・ヤボ（CVI）
副会長・アジア	シェイク・アーマッド（KUW）
副会長・ヨーロッパ	（保　留）
副会長・パンアメリカ	マヌエル・ルイス・オリベイラ（BRA）
専務理事	レイモンド・ハーン（FRA）
財務担当	ミゲル・ロカ・マス（ESP）
COC委員長	ピーター・ミューレマター（SUI）
PRC委員長	キャルタン・シュタインバッハ（ISL）
CCM委員長	B．N．S．アブ・マルズーク（KUW）
MC委員長	Dr．ジイス・ランゲボルト（NED）
CCP委員長	カリン・ニルソン・グリーン（SWE）

ＡＨＦ

会　長	シェイク・アーマッド（KUW）
副会長	アリ・レザ・ラヒミ（IRI）
副会長	アブデュラ・アシュール（LIB）
副会長	渡邊佳英（JAP）
専務理事	Dr．ロンシャン・L・アナンド（IND）
財務担当	バダー・M・アル・ダヤブ（KUW）
評議員	アミン・アル・バーワニー（OMA）
評議員	アブデュル・カリム・アル・ライー（QAT）
評議員	チュン・ジョ・パク（KOR）
評議員	フィタク・マングコーンチャイヤ（THA）

〈男子世界選手権東アジア予選個人表彰〉

上海で行われた世界選手権東アジア予選（既報）での素晴らしいパフォーマンスで以下の選手が表彰された。

ベストゴールキーパー　イ・スクハン（韓国）
ベストウィング　山口　修（日本）
ベストピボット　ワン・シンドン（中国）
ベストスローアー　ツウ・ウェンシン（中国）
最優秀選手　ペク・ウォンチョル（韓国）

〈女子世界選手権のアフリカ代表決まる〉

2001年12月３日より16日まで、イタリアで開催される女子世界選手権のアフリカ代表は、アルジェリアで開かれたアフリカ選手権で決定した。アンゴラ、コンゴ、チュニジアが、８カ国によるトーナメントの、それぞれ１位から３位となった。以下が主要な結果である。

〈決　勝〉
アンゴラ　30―21　コンゴ
〈３位決定戦〉
チュニジア　34―33　カメルーン

〈女子ジュニア世界選手権ヨーロッパ代表決まる〉

2001年ハンガリーで開催される女子ジュニア世界選手権ヨーロッパ代表は、フランスで、ルーマニア、ロシア、クロアチア、スウェーデン、スペインの５チームを決定した。これらのチームはヨーロッパ選手権で１位から５位になったもので、主な結果は以下のとおりである。

〈決　勝〉
ロシア　28―30　ルーマニア
〈３位決定戦〉
スウェーデン　23―25　クロアチア
〈５位決定戦〉
ノルウェー　20―25　スペイン

世界選手権ヨーロッパ枠の残りは、2001年４月13日から15日の予選トーナメントで決定される。

〈男子ジュニア世界選手権ヨーロッパ代表決まる〉

2001年８月20日から９月２日までスイスで開催される男子ジュニア世界選手権に参加する最初の５カ国が決まった。ユーゴスラビア、ベラルーシ、スペイン、デンマーク、スロヴェニアが、アテネのヨーロッパ選手権で資格を得たもの。主な結果は以下の通りである。

〈決　勝〉
ユーゴスラビア　34―29　ベラルーシ
〈３位決定戦〉
デンマーク　22―30　スペイン
〈５位決定戦〉
スロヴェニア　30―29　ハンガリー

ヨーロッパ代表枠の残りは、女子ジュニア同様４月13日から15日の予選で決まる。

〈第８回女子アジア選手権での個人表彰〉

第８回女子アジア選手権（既報）でのパフォーマンスで以下の選手が表彰された。

ベストゴールキーパー　オー・ヨンラン（韓国）
ベストウィング　ツァオ・イン（中国）
ベストピボット　田中美音子（日本）
ベストスローアー　コー・ウォンスク（DPRK）
最優秀選手　田中美音子（日本）

〈2001年男子世界選手権（フランス）予選ラウンド日程決まる〉

2001年男子世界選手権予選ラウンドグループ分けは、表2のように決定されている。

表2

Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ
スウェーデン	フランス	スペイン	ロシア
エジプト	アルゼンチン	クロアチア	スロヴェニア
ポルトガル	ユーゴスラビア	ドイツ	ノルウェー
アイスランド	アルジェリア	韓国	チュニジア
モロッコ	クウェート	キューバ	ウクライナ
チェコ共和国	ブラジル	米国	サウジアラビア

ＩＨＦ競技開催委員会は、組織委員会のフランスハンドボール連盟、ＴＶ・広告権販売代理店スポーツプラスとともに、2001年男子世界選手権大会の競技日程を決定した。この大会は、１月23日から２月４日まで、フランスの９都市で開催される。

フランスは、エイトファイナルと準々決勝をアルベールビルで行うことを決定。その他のトーナメント戦は、アムネビル、マルセイユ、ツールズで行うが、どこで、どのチームが試合を行うかは、後日、競技開催委員会が決定する。準決勝、決勝、順位決定戦はパリで行われる。

レフェリーも以下のように決定された。
ヨシッチ／ルディッチ（クロアチア）　ボイ／ジェンセン（デンマーク）　ガルシア／モレノ（フランス）　レンム／ウルリッヒ（ドイツ）　ミガス／バヴァス（ギリシャ）　アル・ジャナヒ／アル・ラシード（サウジ）　アブデュル・フセイン／ハイダー（クウェート）　オイエ／ホグスネス（ノルウェー）　ナチェフスキー／ナチェフスキー（マケドニア）　グヤオ／マカオ（ポルトガル）　ムベング／セイェ（セネガル）　カリン／コリッチ（スロベニア）ハンソン／オルソン（スウェーデン）　リュドヴィク／ヴァクラ（ウクライナ）アヌシク／ボイセン（ＵＳＡ）　グルコヴィッチ／インブロンイェフ（ユーゴスラビア）

〈2001年男女ジュニア及び女子世界選手権参加チーム続々決まる〉

その他の３つの世界選手権の参加も形が整い始めた。以下のチームが参加資格を得ている。（表３）

〈シドニーオリンピックオールスターチーム〉

シドニーオリンピック男女それぞれの優秀選手のオールスターチームが発表されている。アジアからは、男子で大同特殊鋼で活躍している韓国のペク・ウォンチョル、女子でイズミで活躍している韓国のオー・ソンオクが選ばれている。

☆男子オールスターチーム

ピーター・ゲンツェル／スウェーデン・ＧＫ
ラファエル・ギボーサ／スペイン・左サイド
ドラガン・スクルビッチ／ユーゴスラビア・ポスト
レフ・ヴォローニン／ロシア・右サイド
ステファン・ロフグレン／スウェーデン・左45°
タラント・ドゥイシェバウエフ／スペイン・センター
ペク・ウォンチョル／韓国・右45°

☆女子オールスターチーム

ハイディ・ツグム／ノルウェー・ＧＫ
アネッテ・ホフマンモベルグ／デンマーク・左サイド
ヴェロニク・ペクーローラン／フランス・ポスト
ジャンヌ・コーリング／デンマーク・右サイド
シャースティ・グリニ／ノルウェー・左45°
オー・ソンオク／韓国・センター
ボヤナ・ラデュロヴィ／ハンガリー・右45°

表３　女子ジュニア世界選手権（ハンガリー、７月29日～８月12日）

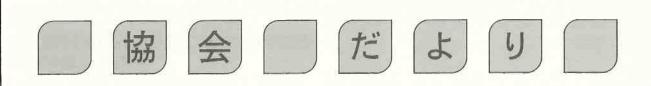
第１シード	ルーマニア	ロシア	クロアチア	スウェーデン
第２シード	スペイン	EHF 6	EHF 7	EHF 8
第３シード	韓国	チャイニーズ タイペイ	EHF 9	ハンガリー
第４シード	PATHF 1	EHF10	アンゴラ	日本
第５シード	チュニジア	EHF11	中国	PATHF 2

男子ジュニア世界選手権（スイス、８月19日～９月２日）

第１シード	ユーゴスラビア	ベラルーシ	エジプト	スペイン
第２シード	デンマーク	スロヴェニア	EHF 6	EHF 7
第３シード	チュニジア	EHF 8	EHF 9	スイス
第４シード	AHF 1	PATHF 1	EHF10	アルジェリア
第５シード	EHF11	AHF 2	PATHF 2	南アフリカ

女子世界選手権（イタリア、12月２日～16日）

第１シード	ノルウェー	EHF 1	EHF 2	EHF 3
第２シード	EHF 4	EHF 5	EHF 6	EHF 7
第３シード	韓国	EHF 8	EHF 9	イタリア
第４シード	EHF10	アンゴラ	PATHF 1	日本
第５シード	EHF11	(DPRK)	コンゴ	PATHF 2
第６シード	EHF12	チュニジア	PATHF 3	EHF13

〈注〉
EHF：ヨーロッパ大陸連盟
PATHF：アメリカ大陸連盟
AHF：アジア大陸連盟

平成12年度第2回 全国理事会

［日時］平成12年11月18日（土）
13時〜16時
［場所］南青山会館新館1階会議室
［出席者］中澤副会長、山下専務理事代行、常務理事6名、理事4名、参事8名、監事3名、事務局2名、オブザーバー3名

［報告事項］

1. 補助金・助成金不適切受給問題について

詳細な経過説明とそれに伴う処理、処分について今後の方向が示された。

2. 読売スポーツ賞について

田中美音子選手を推薦。

3. 普及特別委員会について

普及の総合的施策を検討し提言することを目的とし、今後地域スポーツが重要となると判断されるので、ジュニア層の拡大をはかるために地域の発展に重点をおく。委員構成について案が示された。

4. 審判審査指導委員会報告

A・B級審査、JHAレフェリーコース、レフェリー評価について、日本リーグ審判員のための研修会について、新ルールについて、平成12年度審判員評価について。

5. 国体夏季大会への移行について

兵庫国体以降が対象となる。2月全国理事会で決定したいので、ブロックで検討していただきたい旨依頼された。

6. ビーチハンドボールについて

本荘市実行委員会設立総会について、本荘市市長自ら議長をし、開催運営に積極的であることを報告。2001年秋田ワールドゲームズには、JHL選手を含めたチーム編成を行い出場する予定であることを報告。

7. 全日本総合選手権大会について

組み合わせ抽選会報告。

8. その他

AHF・IHF総会、役員選挙について説明。海外拠点活動調査を兼ね参加する。

日本協会組織図の一部変更について報告。

日本リーグについて、地域密着としたリーグとするため、観客動員に協力依頼がなされた。地域密着と関連して、広島ではトップス広島があるが、次は山形で考えられているので、参加チームを募って頂きたい旨要請された。

平成12年度登録のまとめ、第56回国体ブロック参加割り当て数について報告。

新事務局員紹介。

［審議事項］

1. 第2次補正予算について

助成金・補助金の不適切受給による返還金、協賛企業撤退、大会参加・不参加などにより補正を行う第2次補正予算案が提案され、承認された。

2. がんばれハンドボール10万人会について

還元金について、総額方式累進制か、一律還元かを、還元用途も考え再度常務理事会で審議し、次回に還元率を提案する。

3. 助成金・補助金不適切受給による人事・処分について

人事、処分について報告がなされ、発令を平成12年10月21日とし、期間は平成13年3月31日までとすることが承認された。

4. プロ契約選手の登録規定について

日本協会登録選手が、スポーツウェアメーカーと契約するに当たり、JOCとの関係で問題点が生じたが、日本協会にとって期待される効果があるので、これを解消するための規程の策定・施行を早急に行い、2月の全国理事会で事後承認することを承認。

5. ナショナルチーム強化計画について

2004年アテネオリンピックに向けての全日本チームの強化施策として、基本

方針、課題、強化対策内容、アテネ強化特別資金計画が提案された。アテネ出場のためには、現ナショナル強化では不十分であり、U－19、U－23に主体性をおき、日本リーグチームとの連携を取って強化していくことが急務であるので、関係方面の協力を仰ぎたい旨報告があった。

平成12年度11月度 常務理事会

［日時］平成12年11月18日（土）
午前10時～12時30分
［場所］日体協 401会議室
［出席者］中澤副会長、常務理事6名、理事1名、参事1名、事務局2名、オブザーバー1名。

［報告事項］

1. 補助金・助成金不適切受給問題について

文部省、日本体育・学校健康センターに提出する、不適切受給問題の原因と改善に関する取り組みと、内容について報告。

2. 審判審査指導委員会報告

公認審判員審査結果、新競技ルールを平成14年4月に施行すること、平成12年度全日本総合の審判員ノミネートについて、以上3件報告。

3. 国体夏季大会への移行について

「国体夏季大会移行措置に関する各種大会日程および日程案」を提示し、移行の条件として、日体協と確約はしていない状況の中で、全試合体育館使用、参加選手増員を求めていく、移行後の条件を考慮に入れ協力していただきたい旨報告。都道府県協会、各ブロックの意見を充分に聞き入れ、移行に向かって推進することの報告。

4. ビーチハンドボール関連

本荘市実行委員会設立総会報告。
第1回世界ビーチハンドボール選手権大会関連について報告。

5. 全日本総合選手権大会について

組み合わせの報告。男子の部でトヨタ自動車の参加を承認。

6. その他

IHF総会、AHF総会参加について報告。

［審議事項］

1. 第2次補正予算追加修正について

収入の部については、予定した協賛金の目処が立たず、0円とし、支出の部では、不適切受給返還金処理などについて説明がなされた。

2. かんばれハンドボール10万人会について

還元金について、総額方式累進制による還元案を理事会に報告し意見を聴取することとした。

加盟団体登録金は、選手登録等と同様に取り扱うことが確認された。

3. 読売スポーツ賞について

田中美音子選手を推薦することを決定。

4. 普及特別委員会について

目的、役割、構成メンバーについて提案があった。

5. アテネ強化特別委員会について

強化計画について、トップレベルの選手を集め育成する、U－19、U－23より強化するための選手と資金を集める、国内試合の活性化、海外遠征または外国チームの招聘などが報告された。

資金計画について、2000年度より男子チームを対象に支援活動を実施することを承認。運用について、強化委員会と協議し決定することとした。

12年度下期の強化計画について、計画・予算を承認。女子チームに関しては別途協議し決定する。

海外留学制度について、積極的に推進することを確認。

6. その他

プロ契約選手規程策定について、国内において選手が広告宣伝活動を実施する場合、プロ選手を除いて、JOC規程に抵触し活動ができないことから、プロ契約選手の規程を検討することを承認。

日本協会組織図について一部改定を承認。

第56回国体のブロック別参加割り当て数を承認。

佐野和夫監事が公認スポーツ指導者表彰を受ける

（財）日本ハンドボール協会佐野和夫監事が、平成12年12月9日、10日に開催された公認スポーツ指導者全国研修会において、公認スポーツ指導者表彰をお受けになりました。

佐野監事は、審判としてのキャリアはよく知られるところですが、指導者としても神代高校をはじめとして、文部省指導者講習会講師、高体連ハンドボール部長など、ハンドボール指導者として永年の実績をお持ちであり、今回はこれらの業績が認められたものです。

公認資格としては、東京オリンピックを契機として制度化されましたスポーツトレーナー資格を取得され、制度変革を経ながら現在の公認ハンドボールBコーチとなっておられます。

現在は、（財）日本ハンドボール協会監事をはじめ、東京都協会顧問、全日本学生連盟審判長など要職に就かれ、大所高所からハンドボール界のご指導に携わっておられます。

ハンドボール発展のため、今後ますます先生のご指導をお願いするとともに、この度の栄誉に対し心からお祝い申し上げます。

訃報

元日本協会理事の入江信太郎氏が昨年12月8日ご逝去なされました（82歳）。

入江氏は1940年東京オリンピック（戦争で中止）の第1次候補選手となるのをはじめ、昭和39～47年日本送球協会理事、昭和56～61年（財）日本ハンドボール協会理事を歴任されました。日本協会の50周年に当たりましては「日本ハンドボール史」の編集委員長をされました。また、関東協会理事長、会長、茨城県協会理事長、副会長、顧問などを歴任され、勲四等瑞宝章、文部大臣体育功労賞を受賞されるなど数々のご功績を残されました。

全国の皆様にお知らせいたしますとともに、生前のご厚情に感謝し、入江氏のご冥福をお祈り申し上げます。

［2月の行事予定］

［大会］

★全日本実業団チャレンジ2001
　2月11日～13日：大崎電気工業体育館　他
★第7回西日本小学生ハンドボール交流大会
　2月24日～25日：岡山市総合文化体育館

［会議］

☆常務理事会／2月10日（土）　午前・東京
☆第3回理事会／2月10日（土）　午後・東京
☆第2回評議会／2月24日（土）　午後・東京
☆事務取り扱い責任者会議／
　2月25日（日）　青山メトロ会館

HAND BALL CONTENTS FEB

NTSビデオのご案内

申し込み方法

現金書留で、下記の住所に申し込んでください。
〒150-8050　東京都渋谷区神南1-1-1岸記念体育会館内
財団法人　日本ハンドボール協会
NTS強化指導教本＆コーチングビデオ係

1セットの場合：10,000円＋送料（　900円）＝10,900円
2セット以上：（セット数×10,000円）＋送料（1,000円）
セット内容：強化指導教本……1冊、
　コーチングビデオ60分VTR……2巻

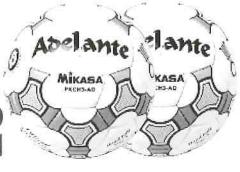
柔らかな感触で、最適なバウンド！

PKCH3-AD DX
5,500円

PKCH2-AD DX
5,400円

PKCH1-ADJ
3,600円

手縫い・国際公認球

PKCH3-AD
4,600円

PKCH2-AD
4,500円

PKCH3-ADR
2,800円

PKCH2-ADR
2,700円

MIKASA®
明星ゴム工業株式会社

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』第四一五号
昭和四十年六月七日
第三種郵便物認可
平成十三年一月二十六日印刷
平成十三年二月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表 三四八一－二三六一
振替 〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人 市原則之
価格は登録金に含む